

詩集

きみの夢に届くまで

青大井空



目次

パート1

(1) きみの夢に届くまで	
きみの夢に届くまで	5
(2) 面影にふる雪	
面影にふる雪	9
(3) 冬のお風呂	
冬のお風呂	13
(4) 雪だるまの会話	
雪だるまの会話	17
(5) 結晶	
結晶	21
(6) 冬のカルーセル	
冬のカルーセル	25
(7) 雪のにおい、雪の音	
雪のにおい、雪の音	29
(8) サンタクロース	
サンタクロース	33
(9) 愛する	
愛する	37
(10) 新東京駅	
新東京駅	41
(11) 少女へ	
少女へ	45
(12) ヘリコプター	
ヘリコプター	49

(13) いいわけ	
いいわけ	53
(14) ネオン街をよこぎって	
ネオン街をよこぎって	57
(15) 憧れ	
憧れ	61
(16) 世界で一番美しい場所	
世界で一番美しい場所	65
(17) パラダイスを桃にゆずって	
パラダイスを桃にゆずって	69
(18) 少女へ(海)	
少女へ(海)	73
(19) 戦場	
戦場	77
(20) つの	
つの	81
(21) 若葉の頃	
若葉の頃	85
(22) 夜を抱きしめて	
夜を抱きしめて	89
(23) ロンリネス	
ロンリネス	93
(24) バッターボックス	
バッターボックス	97
(25) おやすみ東京	
おやすみ東京	101
(26) 追伸	
追伸	105
(27) きみが星なら	
きみが星なら	109
(28) かげろう	

かげろう	113
(29) 夢の樹	
夢の樹	119
(30) 抱擁あるいは横浜	
抱擁あるいは横浜	123
(31) スター誕生	
スター誕生	127
(32) 少女へ(歌)	
少女へ(歌)	131
(33) ダンボールの野良猫	
ダンボールの野良猫	137
(34) 夜明け前のネカフェで	
夜明け前のネカフェで	141
(35) リンダあるいは	
リンダあるいは	145
(36) 林屋の紀ちゃんが	
林屋の紀ちゃんが	151
(37) 銀河の雨が降る夜に	
銀河の雨が降る夜に	157
(38) 恋文	
恋文	163
(39) うた	
うた	167
(40) 片想い	
片想い	171
(41) 銀河の扉	
銀河の扉	175
(42) 星が泣く時	
星が泣く時	179
(43) ふるさと	
ふるさと	183

(44) 長距離トラックの運ちゃんと 長距離トラックの運ちゃんと	189
(45) 最後のハイキング 最後のハイキング	195
(46) ハッピーバースディ ハッピーバースディ	199
(47) 木漏れ陽の中へ 木洩れ陽の中へ	203
(48) 風の無人駅 風の無人駅	207
(49) マザーアース マザーアース	211
(50) 見上げてごらん 見上げてごらん	217
(51) 雨に消えた微笑み 雨に消えた微笑み	221
(52) 傘にあたる雨粒の音 傘にあたる雨粒の音	225
(53) 祈り 祈り	229
(54) 天気予報 天気予報	233
(55) 結婚相談所 結婚相談所	237
(56) はだか電球 はだか電球	241
(57) あなたの伸びた爪に あなたの伸びた爪に	245
(58) お風呂 お風呂	249
(59) いたいの	

いたいの	253
(60) 鏡の中のわたしへ	
鏡の中のわたしへ	257
(61) キリギリスとアリ	
キリギリスとアリ	263
(62) 雨花	
雨花	267
(63) 星景色	
星景色	271
(64) オキナワの雨	
オキナワの雨	275
(65) 明日夜明け前に	
明日夜明け前に	279
(66) 草のバイオリン	
草のバイオリン	285
(67) 夜が明ける前に	
夜が明ける前に	289
(68) 病名	
病名	293
(69) ぼくたちの夢は死なない	
ぼくたちの夢は死なない	297
(70) 海鳴り	
海鳴り	301
(71) 南荒尾駅で会いましょう	
南荒尾駅で会いましょう	305
(72) 波	
波	311
(73) 風鈴少年	
風鈴少年	315
(74) テネシーワルツ	
テネシーワルツ	319

(75) チュウインガムの少年	
チュウインガムの少年	323
(76) 少女へ(夏)	
少女へ(夏)	327
(77) 海に触ってみた	
海に触ってみた	331
(78) あこがれ	
あこがれ	335
(79) グリコのおまけ	
グリコのおまけ	339
(80) 夏の記憶	
夏の記憶	343
(81) 夏の木漏れ陽	
夏の木漏れ陽	349
(82) 宝石箱	
宝石箱	353
(83) ずぶ濡れの野良猫	
ずぶ濡れの野良猫	357
(84) ピエロ	
ピエロ	361
(85) 引き潮	
引き潮	365
(86) 地動説	
地動説	369
(87) エスカレーター	
エスカレーター	375
(88) ひみつの国	
ひみつの国	379
(89) 九月に渋谷の	
九月に渋谷の	383
(90) さようならをするために	

さようならをするために	387
(9 1) ネオン街の雨宿り	
ネオン街の雨宿り	391
(9 2) 雨の赤信号	
雨の赤信号	395
(9 3) 夢のカルーセル	
夢のカルーセル	399
(9 4) 与謝野晶子になれなかった	
与謝野晶子になれなかった	403
(9 5) 戦争ゲーム	
戦争ゲーム	409
(9 6) 柿の木だった頃	
柿の木だった頃	413
(9 7) スレーブ人形	
スレーブ人形	419
(9 8) ラストダンス	
ラストダンス	423
(9 9) 深夜放送	
深夜放送	429
(100) きみはイマジンと歌うけれど	
きみはイマジンと歌うけれど	433
パート2	
(1) おやすみメリークリスマス	
おやすみメリークリスマス	441
(2) クリスマスツリーが終わる時	
クリスマスツリーが終わる時	445
(3) 冬の弁当	
冬の弁当	449
(4) ぼくが海なら	
ぼくが海なら	453

(5) 夜明けのカルーセル	
夜明けのカルーセル	457
(6) 交響曲第5番	
交響曲第5番	463
(7) 手術を断って	
手術を断って	469
(8) マイホーム	
マイホーム	473
(9) カンパニー	
カンパニー	477
(10) いつか王子様が	
いつか王子様が	483
(11) 旅に疲れた心は	
旅に疲れた心は	487
(12) 風	
風	491
(13) リヤカーでお引越	
リヤカーでお引越	495
(14) 夕焼け雲	
夕焼け雲	499
(15) 五月の自転車	
五月の自転車	503
(16) 桜と白い仔犬と明日のために	
桜と白い仔犬と明日のために	509
(17) 人間だった日の記憶	
人間だった日の記憶	513
(18) エイリアン	
エイリアン	517
(19) 夜の国道	
夜の国道	521
(20) 大地に耳をあて	

大地に耳をあて	525
(2 1) オオカミ少女	
オオカミ少女	529
(2 2) 花束	
花束	533
(2 3) 雪の夜の約束	
雪の夜の約束	537
(2 4) 死亡通知	
死亡通知	541
(2 5) 沖	
沖	547
(2 6) 遠い一本のバオバブの木へ	
遠い一本のバオバブの木へ	551
(2 7) 風と草の記憶箱	
風と草の記憶箱	555
(2 8) 住宅街の一角の安アパート	
住宅街の一角の安アパート	559
(2 9) 夜空の不思議、地球の不思議	
夜空の不思議、地球の不思議	563
(3 0) 千年の孤独	
千年の孤独	567
(3 1) 諦念	
諦念	571
(3 2) 少女が虹を描いている	
少女が虹を描いている	575
(3 3) 水平線	
水平線	579
(3 4) 膝っ小僧	
膝っ小僧	583
(3 5) Mr ロンリー	
Mr ロンリー	587

(36) 雪の日のカルーセル	
雪の日のカルーセル	591
(37) 宇宙を燃やしたら	
宇宙を燃やしたら	597
(38) ぼくの夢	
ぼくの夢	601
(39) ギターも夢見る	
ギターも夢見る	605
(40) 玉ねぎの涙	
玉ねぎの涙	609
改訂履歴	
改訂履歴	613
終わりに	
終わりに	617

パート 1

(1) きみの夢に届くまで

きみの夢に届くまで

この夜の何処かで
今もきみが眠っているなら
この夜の何処かに
今きみはひとりぼっち
寒そうに身を隠しているから
今宵も降り頻る銀河の雨の中を
宛てもなくさがしている
今もこの夜の都会の片隅
ネオンの雨にずぶ濡れに打たれながら
膝抱えさがしているのは
きみの夢

幾数千万の人波に紛れながら
路上に落ちた夢の欠片掻き集め
きみの笑い顔を作って
都会に零れ落ちた涙の欠片の中に
きみの涙を見つけ出せば
今も夢の中で俺をさがし求める
きみの姿が見えるから

この夜の何処かに
今もきみが眠っているなら
この夜の何処かで
今きみが見ている夢見つけ出すため
この夜の無限の闇の中で唄っている
今はただ唄っているだけ
きみの夢に届くまで

(2) 面影にふる雪

面影にふる雪

いとしかった人の面影にも
雪が降り積もればいいのに

純白のけがれない雪が
しずかにしんしんと
幾夜もかけて
いくえにもいくえにも
降りしきる雪の中で

それを思いつづけている
わたしさえ
気付かぬうちに

まるでこわれた映写機のように
それをただいたずらに
いつまでも映し出す
わたしの心の大地へと

思い出もいとしさも
記憶も感触もぬくもりも
ふるえもこどうもといきも
交し合った
さようならのことばも
I love y o uの言葉さえも

しんしんと降りしきる
雪の日々の中で
純白の雪につつまれ

そしていつかしずかに
とけてゆけばいいのに
雪といっしょに

雪といっしょに
何もなかったかのように
とけてゆけばいい
わたしさえ気付かぬうちに

いとしかった人の面影にも
雪が降り積もればいいのに

*この詩は、昔『詩とメルヘン』という投稿雑誌(既に廃刊)に、青木五月のペンネームで初めて掲載された詩です。

(3) 冬のお風呂

冬のお風呂

ひざを抱えている
ずっと
ひざ小僧抱いている

冷めない水があるならば

この星に降り注いだ
雨の中のほんのわずかの水が
この星のかたすみで暮らすわたしを
今やさしく包み込み
凍えたわたしを暖める奇蹟

昔々生命は
冬のお風呂の中で誕生した

純白の雪の降りしきる夜
この星に生まれた生命は
美しい生命で
ありたいと願った

凍えた体と
汚れた心を包み込む
冬の夜の奇蹟

ひざを抱えている
ずっと
ひざ小僧抱いている

いつか水は冷めると
知っていて
いつか夢も冷めると

知っていて

(4) 雪だるまの会話

雪だるまの会話

ぼくたち
雪でできているから
冷たいはずだよ

子供たちが
白い息をはきはき
つくっていたし
こんなに風も
空気も冷たいし

冷たくなかったら
ぼくたち
とけてしまうはずだよ

なのに
なんだかぼくたち
あったかいね

ほっぺただって
まっかにほてるくらい
あったかくて

やさしくて

ぼくたち
こうふくだよ

ほら
こんな真夜中なのに
子供部屋の窓から
ねむたそうな

つぶらな瞳が

ぼくたちが

とけていないか

心配そうに見ているよ

(5) 結晶

結晶

あ、ゆきだ
ほら、ねえ、ゆきが
空からちらちら
ひらひら舞い落ちて
舞い降りて
こっちへやってくるね

どうして雪は
あんなに白いのかな

今もどこかで誰かが
夢をつかまえようとして
もがいている
人知れずひとりぼっちで
もがいているから

人がどうして人に
感動するか知っているかい
みんな人なんて
生まれた時からずっと
見てきたはずなのに

どうして人は
どんなにみじめな姿になっても
生きることをやめないか
生きていることだけは
やめてしまわないのか

あ、ゆきだ
ほら、ねえ、ゆきが
空から舞い降りて
風に吹かれて

こっちへやってくる

どうして雪は
おちてくるのかな
迷うことなく
こんな薄汚れた
都会の街や人の背中へと

あ、ゆきだ
ほら、ねえ、もし
夢にかたちがあるなら
きつとこんなかたち
しているような気がする

まっ白なゆきが
空から落ちてくるね

夢のかたちをした雪が
雪のかたちをした夢が

(6) 冬のカルーセル

冬のカルーセル

止まったままのカルーセル

雨の日だけ
カルーセルが回っているのを
見た子どもは
カルーセルは雨の日だけ
回るものだと思う

風が吹く時だけ
カルーセルが回っているのを
見た子どもは
カルーセルは
風が回しているのだと思う

止まったままのカルーセル

ひとりの子は
雨が降るのを待ち
別の子は風が吹くのを
待っている

止まったままのカルーセル

雪が降る時だけ
カルーセルが回っているのを
見た子どもは

もう一度
雪の中で回る
カルーセルが見たくて
冬の遊園地のすみで

じっと待っている
膝抱え雪が降るのを
待っているものだから

凍り付くまで
白い息吐き吐き
誰にも知られず待っていたい
待っていたかった

やがて誰かが
迎えに来てくれる日暮れまで
子どもは待っていたいと思う

止まったままのカルーセル

カルーセルは
子どもたちのこどうで
回っている

(7) 雪のにおい、雪の音

雪のにおい、雪の音

背中にとけた雪の一片を
猫が気付かないでいる
ふっと冷たく思ったろうか
雪とも知らずに

野良猫の夢の中にも
降るといい
ダンボールの家にも
積もればいい

夢から醒めた小猫が
雪のにおいを嗅いでいる
くんくんくんくん
この物体は一体何だ

夜明け前に
夢から醒めた野良猫が
耳を澄まして
聴いている雪の音

いとしかった人の足音
思い出すように、聴いている

(8) サンタクロース

サンタクロース

自分より
不幸せな人を見ると
自分が幸せなことが
なんだか
恥ずかしくなる

人込みの中で
泣いている人を見ると
笑っている自分の顔が
ロボットのように思う

飢えた子どもたちの映像を
TVでながめながら
おなかいっぱい
ごはんを食べている
わたしがいる

電車を下りて
住む家のない人たちが
ふるえている冬の通りを
足早に通り抜け
暖房の効いた
家のドアをあける時

やっぱりどうしても
振り向いてしまう
わたしはばかです、ただの

なあんにもいいこと
なかったんですよ
わたしの一生って
ほんとに、なにひとつ、と

語る人に

それが
なあにもいいこと
なかったことが
一番いいことなんですよ、と
答えたら

それは、悪い冗談ですか？ と
言い返された

けれどわたしはいつも
わたしが
幸せだったりすることが

恥ずかしかった

クリスマスイヴには
いつも
サンタクロースになって
世界中を飛び回り
からっぽの白い袋の中に
世界中のさびしさ
かき集めたかった

世界中のさびしさを
ひとつ残らず
奪い去りたかった

サンタクロースに、なって

(9) 愛する

愛する

きみが空を愛するように
ぼくはきみを愛した

きみが海を愛するように
ぼくはきみを愛した

きみが星を愛するように
ぼくはきみを愛した

きみが風を愛するように
ぼくはきみを愛した

きみが故郷を愛するように
ぼくはきみを愛した

なつかしい空、なつかしい海
なつかしい星、なつかしい風
なつかしい街

初めて会った時
初めて会った人なのに
なつかしかった
あのときみが
どうしてもなつかしかった

限りない空のように
限りない海のように
限りない星のように
限りない風のように
限りない故郷のように

きみが空を愛するように

きみが海を愛するように
きみが星を愛するように
きみが風を愛するように
きみが故郷を愛するように

ぼくはきみを愛する

(10) 新東京駅

新東京駅

生まれてはじめて
上京した人だけが下車する
新東京ステーション

一度下車したら
もう二度と訪れることはない

夢やふれ帰郷する人も
都会になじんで
東京人になってしまった人も

もう二度と再び
その駅の改札を
くぐることはできない

ただ一度生まれてはじめて
東京を目にする時にだけ
その駅のプラットホームに
佇むことができる

地図にも時刻表にも存在しない
その駅の……

新下関

新山口
新岩国
新尾道
新倉敷

新神戸
新大阪

新富士
新横浜

かばんに夢だけをつめこんだ
少年の乗った夜行列車だけが停車する

新東京ステーション

(1 1) 少女へ

少女へ

少女へ
生き急ぐきみへ

その席に座っていた
ひとりの少女が
じっと花を見つめていたことや
時々ひとりで笑っていたことを
誰も知らなくても

痛々しいほど腰の曲がった
老婆が歩く姿や
駅前の階段に座り込んだ
浮浪者の姿をどんなにか
かなしそうな目で見ていたことに
誰も気付いていなかったとしても

花の中に少女のほほえみは残る
老婆や男の心の片すみに
少女の涙の粒は住みついて

少女の声や夢は
小さなかけらに姿を変え
それは種となり土に眠り
やがて春がまた訪れて

去年の今頃
その席にひとりの少女が
座っていたことや
少女の顔や口癖など
誰もみな忘れ去り、時は流れ

そして誰にも知られないまま

少女が静かに
その席を立ち去っていった後

人々はその席に誰かいたような気もし
けれど風か何かが吹いていただけ
だったのかも知れないと思いながら

幾千の人々の中の
ほんの何人かだけが
少女の見ていた花に気付き

ふと目をやると
何だか花が自分に向かって
ほほえみかけているような気がして

思わず立ち止まり
あたりを見回してみる
幾千の人のいる人波の中に

なんだかふいに
どこかにだれかが隠れていて
ちゃんといつも
自分のことを見守っていてくれる

そんな気がする

だからぼくたちはね
永遠に生き続けてゆくんだよ

だからぼくたちは
ひとつなんだよ

(12) ヘリコプター

ヘリコプター

草原で寝転がる
わたしの上空に

ヘリコプターが飛んできた
てんとう虫という名の

ヘリコプターは
わたしのほっぺたに
影を落として

なんにも知らない
ヘリコプターは
そして
わたしのほっぺたへと
着陸します

ゆっくり、ゆっくりと
着陸しまーす

今その空港が雨で
濡れているとも知らないで
涙という雨で

草原に寝転がる
わたしの上空に

ヘリコプターが飛んできた

(13) いいわけ

いいわけ

ぼくはきみに
さようならとは
言わなかった

ぼくはきみに
さようならを
言わなかった

ぼくはきみと
さようならを
交わさなかった

夜空を見上げると
満天の星が瞬いていた
きみが去っていった
夜だというのに

静かに風が
ぼくのほおをなでて
吹きすぎていった

きみはいまごろ
どのあたりを
旅しているだろうか

ふとぼくは
そんなふう
本当に自然に
そんなふう
思えた
強がりや慰めや
気休めじゃなく
確かに

そんなふうに思えた

今ぼくはひとり
きみが好きだった
港の灯りを見ている
何も考えずぼんやりと
ただながめている

こうやって
きみと出会ったことも
きみともう二度と再び
会うことは
なくなってしまったと
いうことも

みんな
すべてしずかに
忘れてしまってもいいと
思うくらい
きれいな港の灯りを
ただながめている

昔この風景を愛していた
ひとりの少女がいたことを
ただしずかに
忘れてゆくように
そしてそのとなりで
ぼくが生きていたことさえ
みんな
忘れ去ってゆくように

ぼくはきみに
さようならとは
言わなかった

(14) ネオン街をよこぎって

ネオン街をよこぎって

ねえ、きこえてる
受話器を通して
ねえ、こっちの音
そう
あなたの好きだった東京の音
今わたし
新宿駅の公衆電話からかけているから

ええ相変わらずよ
土曜日の夜だからすごい人波
でもわたしは仕事だから

これから駅の地下道を抜け表に出て
イルミネーションの海を人波をかきわけ
ネオン街をよこぎって
オフィスのあるビルに行くの
ええ、元気よ

ビルのエレベータをまっすぐに上がり
オフィスに辿りつくと
そこは人影もなくしずかで
暗闇の中にてさぐりで
照明のスイッチをさがす

パソコンの電源を入れ
コーヒーを沸かし
そうして窓から見おろす
新宿の街を眺めながら

春が過ぎ夏が訪れ
秋が去り冬がまたやって来る
そのしずかなくりかえしの中で

きのうきゅうに
あなたの歌を忘れてしまっていることに
気付いてね
なんだかおかしくて
わたしの詞に
あなたがつけてくれたメロディだったのに
どうしても思い出せなくて

それで電話してみたの

わたしたちの夢だったあの歌の
東京が大好きだったあなたの
いつか世界中をふるわせてみせると
語り明かした若かりしわたしたちの

そして今はただ新宿のかたすみ
深夜人影のないオフィスで
ひとりたたずむ女の唇を
ふるわせているだけの歌なのだけれど

今もネオン街をよこぎる時
風俗店の看板を持ったあなたが
そこにいるような気がする

(15) 憧れ

憧れ

昔わたしが
わたしだったもの

石、草、花
木、木の葉

空気、水
波、波音
雨、雪

虫、土
大地、風

駅、夜行列車
レール、枕木
プラットフォーム

海岸線、地平線
夕闇、黄昏
木洩れ陽、朝焼け

銀河、満天の星
ネオン、はーばーらいと
雑踏の足音

昔
わたしが
わたしだったもの

草
きみの足元に

咲いていた

風

きみのほおを

撫でていった

夜明け

いつも

きみを包み込む

夜明けのしずけさで

ありたかった

(16) 世界で一番美しい場所

世界で一番美しい場所

とさつ場に家畜をのせてゆくトラックは
世界で一番美しい場所を通してほしい
トラックの荷台は
柔らかな網で囲まれ
家畜たちが世界を見られるようにして

海や山を通してほしい
潮騒や鳥たちのさえずりの中を
冷たくすんだ海の水の中を

きらきらと光るかれらの瞳の中に
この世界の美しさを
とどめてゆけるように

花の中を飛び回る蝶
風に揺れる樹の葉、木洩れ陽
夏の中になき盛る蝉たちの声
満天の星、銀河
夕暮れの陽にきらめくなぎさ
静かに降りしきる雪

生きる生命の美しさを

とさつ場に家畜をのせてゆくトラックは
世界で一番美しい場所を通してほしい

(17) パラダイスを桃にゆずって

パラダイスを桃にゆずって

あ、あの木
桜だったのね

桜三月桜咲く

美しいのに
かなしそうなのは
なぜ、ですか

かなしくせに
美しく咲くのは

ここは天国ですか
パラダイスを桃にゆずって

誰のためにあなたは咲くの

ひっそりとほんとうは
いとしいあなたのために
咲きたかった

風にゆれる草花のように
咲きたかった

ただあなたがいてくれたら
そこがわたしの天国です

あなたのいない天国が
わたしには
地獄であるように

パラダイスを桃にゆずって

三月を菜の花にあずけて

ただひっそりと
咲きたかった
ただあなたのために
咲きたかっただけ

そんな四月の花

桜三月桜咲く

あ、あの木
桜だったのね

(18) 少女へ(海)

少女へ (海)

貝殻、足跡、波の音、
空の青さ、木漏れ陽、プラタナスの木陰、
夕映え、夕立、虹、
駅のホーム、街の灯り、花火、
星座、ラヴソング、風のおい、
夜明けの静けさ……
目印はいくつもある、この星の上に

もしもきみが遠い国へ行って
誰もきみの行方を
知る者はいなくなっても
きみが残していったすべてのものが
やがてこの地上から
永遠に忘れ去られた後にも

ぼくは海の夕映えのきらめきの中で
潮風と遊ぶきみの笑い声と出会うんだ
きらきらと輝く波の中で
いつも寂しそうにしているぼくの背中を
叩いてゆく潮風にまじって
ぼくの耳元でくすぐるように笑うんだ

そしたらぼくは相変わらずだなんて
つぶやいてみる
するとまわりの人は驚いて
へんな顔でぼくを見るだろう
だってもうきみは
この星の上には存在しないことに、
なっているからね

だけどこの宇宙の何処を探しても
こんなに青く澄んだ海は

多分この星にしかないのだから
だとしたらあんなに海が好きだったきみが
たとえ今宇宙の果てをさすらっていても
この大宇宙の何処を旅していたとしても
時にはこの海辺に
立ち寄ることもあるだろう

だからいつきみが
帰ってきてもいいように
ぼくはいつも
この星の上で待っているから

目印はいくつもある、この星の上に
きみとぼくが
大の仲良しだったことの証し
きみとぼくが
寄り添って生きた目印は
いつまでもこの星の上に残っている
消え去ることなく
幾千の人々が生き続けるこの星の上に

目印はいくつもある、この星の上に
この星の上でぼくたちが
いつかまたやり直せるように
時を越え再びめぐり会えるように

目印はいくつもある、この星の上に

(19) 戦場

戦場

傷ついた子猫を
海に連れて行って
あげたかった

傷ついた子猫と
そして一日中
海を見ていたかった

昨日傷だらけの姿で
生まれてきた子猫と
海を見ていたかった

子猫が力つき
しずかな眠りにつくまで

昨日までいたところへ
また戻ってゆくまで

傷ついた子猫に
しおざいの記憶だけは
持って行ってほしかった
空と海の青さだけは
持って行ってほしかったから

傷ついた子猫と
海を見ていたかった

ここは天国じゃない
生まれてきたものにとって

ここは戦場

ここはせんじょうだから

(20) つの

つゆ

つゆが伸びたよ
つゆがのびたよ

やわらかで
誰もこわがらない
つゆが二本
のびてきたよ

やさしい顔して
やさしい雨に濡れながら

つゆが折れたよ
つゆがおれたよ

雨粒のキスにおどろいて
はずかしそうにまっ赤な顔して

かたつむりの
おつむの中に
かえっていったよ

(2 1) 若葉の頃

若葉の頃

かみさま
わたしは一度もかみさまなど
信じたことはないし
おそらくこれからだって
ずっとあなたのことを信じたり
あなたにすがったりして
生きてゆくことはないだろう

けれど今日今だけは
わたしにあなたの名を
となえさせて下さい
かみさま

どんな小さな草の花にも
生命は宿るものなのですね

かみさまマイラヴ

あなたに
口付けしたいほどの
今のおろかな
わたしなのです

どんな生命にも
よろこびは
宿るものなのですね

ことばも使えず
立って歩くこともままならない
そんな生まれた時から
ずっと今日まで
寝たきりだったひとり娘の

そのやせた体を
いつものように
洗ってあげている時
ふとふれた彼女の胸が

今しずかに
ふくらみかけていることに
気付きました
かみさまマイラヴ

気持ちのいい四月の風が
わたしのほほにも吹いています

かみさまマイラヴ

どんな生命にも
よろこびは宿るものなのですね

どうか今だけわたしにも
あなたの名をとなえることを
お許し下さい

(22) 夜を抱きしめて

夜を抱きしめて

気付かなかった
今までちっとも
気付かなかったよ

水がなきゃ
海と呼んじゃいけないと
思っていたから
なんだかね、やっぱり

この夜を抱きしめ

ちゃんと目に見えなきゃ
涙だと感じちゃいけないと
思っていたから

けどもうぼくは愛している

この夜を抱きしめ

この弱々しい腕と臆病な心と
何度も棒にふった運命と
できそこないのぼくの一生をこめて

今せいいっぱい抱きしめるよ
この

いくせんの人がゆきかう
都会の夜の片隅
きみには聴こえないかい

きらきらとまたたく街の灯りは
まるでとわに続く夜の潮騒のようさ

実際ぼくなんか
何度も海と錯覚したことがあるんだ
うんと酒に酔っ払った時とか
うんとひとりぼっちの時

そして今せいいっぱい抱きしめるよ
誰にも何にもしてあげられないけれど
いつも愚痴と泣き言ばかりで
何の役にも立たないけれど

ぼくには見えるんだ
今この夜の中で
たくさんの人が泣いている、と

だからここは海なんだよ
やっぱり
たくさんの人の涙でできた

だからもうぼくは愛している
いくせんの人がゆきかうこの夜を
今はじっと抱きしめて
とわに続く潮騒のように抱きしめて

好きだ、なんて絶対口にしたりしないで

きみの涙を
ぬぐってあげたりはしないけれど
今泣いているきみがいるこの夜を
今きみの涙が生きている
この夜を感じながら

ぼくも生きていくよ

(23) ロンリネス

ロンリネス

ここまでおいで
そしてやさしく抱きしめて

足首だけでいいから
抱きしめて

こおりつくほど冷たい波と
いくせん年の時の彼方から
抱きしめて

一晚
冬の海を見ていようと思ったのに
海が
おかえり、といった
もう電車がなくなるから、ね

ふとさびしいと思ったら
もうしおざいのきこえない場所まで
来ていた

(24) バッターボックス

バッテリーボックス

あなたはいつも夢を見ている
ぼくたちにはとうてい理解できない
壮大な夢

何千億年という歳月と
この大宇宙を舞台とした
あなたの計画

その前に
ぼくたちのちいさな夢や
涙や別れや飢えや苦悩や絶望など
とるにたらないものなのだろう

ぼくたちのかなしみも
この星のいたみもみんな
あなたの計画のため

とおい過去から
そして今もなお
未来までもつづくだろう
人々の嘆き、救いを求める声を

ちゃんと見つめ
ちゃんと耳にしながら
それでもなお
あなたは夢を見ているだけ

どうして救いの手を
さしのべてはくれないのかと
疑うぼくの心さえ見抜き

ほんとうに幸福な世界はくるのかと

だれもが疑いをいだき
もう多くの人があなたを
信じていないことを知っ
ていながら

それでもまだあなたは
何も言わず
ただじっと目を閉じ
夢を見ている

もう世界は
9回裏2アウトランナーなし
2ストライクナッシング

大観衆はみんな絶叫している
なのにあなたはまだ
バットも持たず
目を閉じ
そして祈るように夢を見ている

大観衆はみんな、絶叫している
「かみさま」

もしも緊張しているのなら
タイムをとってもいいんですよ
「かみさま」

(25) おやすみ東京

おやすみ東京

今この街は無数の夢が眠っている
傷つき疲れ壊れかけたきみの夢も
今は深い眠りむさぼっているから

今はただおやすみ
また明日夜が明けたら
たたかいはじまる
また明日たたかうために
明日また
きみの夢守るため

だから今はおやすみ
ここはこの街は
東京はいつも
せんじょうなのだから

(26) 追伸

追伸

ずっと想いつづけていれば
いつかまた会えると信じていたけれど

どうやら今度別の人が
ぼくを好きになってくれそうなので
これからぼくは
あなたを忘れることにする

こんなふうになることが
ぼくたちにとって
一番よかったことなのか
どうかはわからない

何度も激しい雨に打たれ
ひとり夜の都会をさまよい歩き
ぼくの愚かさを責め
あなたを失うことの
いたみからのがれようとして
無理に誰かを愛そうともした

そのたびにぼくの中で
あなたの面影は美しくなり
あなたと出会ったことが
今では夢の中のできごとのように
やさしくあまりにもやさしく
ことあるごとにぼくを
かばおうとしてくれるので

あなたの前で
あんなにわがままだった少年も
今はただ

あなたにありがとう
つぶやいているのです

歳月はそんなふうによさしく
人からいくせんの面影を
少しずつ忘れさせ
忘れゆくことでけれど
人は荷を下ろし
またやり直すことも許され
またいくせんの面影を失うことで
いとおしさを学んでゆくと
いうように

歳月は静かにいつも
人の前をゆっくりと流れ去ってゆく
どうやらそんなふう
この世界はつくられているようです

ずっと想いつづけていれば
いつかまた会えると思っていたけれど
今朝久しぶりに何十年かぶりに
少年の日のような風が
ふいにやさしく
ぼくのほおに吹いてきたので

何だかもうそろそろ
あなたをぼくから
自由にしてあげなきゃいけないと
そんな気がして

追伸

今日ぼくは
あなたを忘れることにしました

(27) きみが星なら

きみが星なら

きみが星なら
誰もいない駅のプラットフォームで
終電車まで見上げている

何度も何度も大きく手を広げてさ
この宇宙のどこかに
きみのいる星がある

きみが風なら
都会の人波にまぎれて
夜明けまで歩きたい

ただぼんやりと
時より口笛吹いたりしてさ
この星のどこかに
きみの風が吹いている

きみが海なら
ぼくは名もない港になろう
そして夜明け前打ち寄せる
きみの涙にしずかに濡れよう

いつまでも、いつまでも
そしてきみのしおざい
聴いていよう

(28) かげろう

かげろう

みなさんは
かげろうという虫を
知っていますか

小学校の先生が
理科の授業の途中で
ふいに話し始めた

季節は夏の前の晴れた午後の
たいくつな陽ざしの中で

昨日
ひとりのクラスメイトが
昨日

ぼくはぼんやりと
外を見ていた

かげろうのいのちは
とても短くて三日間しか
生きてられないのです

かげろうという虫は
三日間しか、そう
そう

それが
ぼくの隣の席のクラスメイトが
昨日突然いなくなって
もう戻ってこないことと
何か関係があるとしても
いいたいのだろうか

ぼくは先生と目と目があって
たいくつそうに
大きくあくびを
ひとつしてみせた

それでもかげろうは
そのあたえられた
限られた時間の中で
せいっぱいに
生きているのではないのでしょうか
もしかしたら
わたしたちなんかより
ずっと充実した一生を
おくっているかもしれません

だから
そう、だから
みなさんも自分に与えられた
許された年月を大切に
生きてほしいのです

そう言うと女の先生は
唇をかみ締めて、涙をこぼした

その時いなくなった
クラスメイトの机の上に
どこからか飛んできた
いっぴきのかげろうがとまって

かげろうはぼくの顔を見た

三日後にはいなくなる虫が
ぼくを見ていた

ぼくの永さにたとえば
数日分にあたる
その一瞬の中で
その大切な生命(いのち)の瞬間の中で

けれどかげろうは
ぼくを見ていた

人はよく
もっとちがう生き方が
できたかもしれないと
口にするけれど

その時かげろうは
うれしそうに
ぼくを見ていた

(29) 夢の樹

夢の樹

花びらが散ったあとの桜が
それでも桜の木であるように

実もとうに落ちて
今は雪におおわれたりんごの木が
それでもやっぱり
りんごの木であるように

めぐりくる季節の中で

昔あなたが
貧しい家の少年だった頃

あなたの勉強机の前の
窓から見えた
あの一本の木は
なんの木だったろう

名も知らない
名前があることさえ
知らなかったその木の枝に

けれど毎年
夏にはせみがとまって鳴き
冬には雪が舞い降りた

まだ少年だったあなたの耳に
せみしぐれはやさしく

まだ少年だったあなたの目に
純白の雪はきらきらまぶしかった

やがてあなたは貧しいその家を出て
東京へと旅立った

あの日あの時
鳴いていたあのせみは
融けていったあの雪のひとひらは

今頃どこでどうして
いることだろう

そしてあなたが去ったあとに
残されたあの一本の木は
あの木の名は

花びらが散ったあとの桜が
それでも桜の木であるように

実もとうに落ちて
今は雪におおわれたりんごの木が
それでもやっぱりりんごの木で
あったように

そして東京で
わたしたちは出会った

あの木はわたし
あの木の名は

ずっとわたし生まれた時から
あなたをまちこがれていたから

夢見るように
まっていたから

あなたが去ったあとの
わたしもやっぱり
あなたを夢見て立っている
一本のわたしの木

(30) 抱擁あるいは横浜

抱擁あるいは横浜

まじめなやつはだめだなんて
ため息ついている間に

夜が明けたら
ふらっと家を出て
どこか遠くへ行きたいなあと思いながら
行くあてもなく
始発電車が海岸線を通った時

ああ、船がいいなあって
横浜で降りて
それから一日中日が暮れるまで
栈橋で外国船を見ていた

けれど勇気がなくて
そのまま雑踏に紛れ
駅前の交番の灯りを見たら

帰りたくなった
少年の頃坊やはまじめでやさしい
男の人になるねって
近所のおばさんたちが言っていたけど

まじめはだめなんだなあって
まじめなやつがうまくいかない
世の中なんだなあ
まじめなやつはまっ先に
自分を責めるから
苦しい人を見ると
楽にしてあげたいと思うから
そんなやつはうまく
生きてゆけないような世界なんだなあ、

ここはさって

交番のすみで

ぽんっとひとつ肩を叩かれて

はっと、目が覚めた気がした

ゆうべ、ねたきりの

だいじなひとをころし、ました

苦しみを抱きしめる方法を教えてください

誰かの苦しみを奪い取る抱擁の仕方

教えてください

おれは幸福より不幸の方が好きだと

強がれる強さを下さい

まじめでも生きられる世界を下さい

苦しくても笑える奇蹟を

下さい

夜が明けたら

ゆっくりゆっくり

歩いてゆくから

(3 1) スター誕生

スター誕生

少年が
夕暮れの空を見上げている

通行人が問いかける
何を見てるの

少年が答える
しー

もうすぐ星が生まれるよ

(3 2) 少女へ (歌)

少女へ (歌)

この地球の片隅
未開の大地のかたすみに
歌うことの好きな一人の少女がいて

少女は夕ご飯の後
こっそりと家を抜け出し
近くの森に行って歌うのです

眠る動物たちや
風のざわめく森の木の葉や
幾種類もの大小様々な虫たち
鳥たちがいて

少し向こうには
荒涼と広がる砂漠があって
月の光にさらさらと
無数の砂の一粒たちが瞬いて

みんな少女の歌を
聴いているのです

けれど彼女の歌を
耳にすることができるのは
彼らだけ
彼らがレコード会社に
彼女を売り込んだり
TVで宣伝したりはしないのです

少女はこの世界に
歌手という職業があることや
いろんなジャンルの
音楽があることも知らず

ピアノやギターといった
楽器のこともしらずに大きくなって

この地球の片隅
未開の大地のかたすみで
誰かと恋をして、また
自分の親たちがそうしたように

元気な男の子や女の子を
この大地の中で産むのです
たくましく力強く

子供たちは彼女のおっばいを
思い切り吸い込みます
少女は少しずつ年を取り

いつか夕ご飯の後に
森に行くことも忘れ
あの森を震わせるほどだった
少女の美声は
そうして静かに
失われてゆくのです

この地球の何処かで
誰かがピアノやギターの演奏をバックに
何万人もの観衆に向かって
歌いかけているその時に

人知れず
少女の夢にもならなかった
歌への想いは
ついてしまうのです

けれど思い出してみてください
たとえば明日きみが
眩しいスポットライトの中で
ひとりの歌手としてデビューする時

きみがどうして
歌を歌おうと思ったか
なぜ歌手になりたいと願ったか

そしてもう遠い昔
ひとりぼっちで泣いていた
幼いきみの耳に
どこからか聴こえてきた
歌のことを

それはもしかすると
この世界の夜の闇の彼方から
海を越え砂漠を越え
また遥か遠い時を越えてやってきた
少女の歌、だったのかもしれない

ただ泣き虫のきみを励ますために

(33) ダンボールの野良猫

ダンボールの野良猫

木枯らしのダンボールにうずくまり
野良猫が眠っているのを

誰も気付かない
ただ空地にダンボールがひとつ
転がっていると思うだけ

この星空と凍りつく冬の荒野で
ダンボールの野良猫が見ている夢は

いつかわたしも見た覚えがある
待ち遠しい春のおいのする夢
まだ土の中で眠る草の芽が見ている夢
海にとけた雪のかけらが
ゆらゆら波をただよいながら
また空に帰る日を夢見ている
そんな夢とおんなじ

寒さに目を覚ました野良猫の
夜更けのダンボールにしみついた
涙のおいを誰も知らない

ダンボールにしみついた
夢のかけらを
誰も分かち合いはしない

夜が明けたら
また生きてゆくための
戦いがはじまる
ダンボールの野良猫

(34) 夜明け前のネカフェで

夜明け前のネカフェで

ここは新宿歌舞伎町
されど今はネオンも消えた大都会の闇の中
薄い壁のみで仕切られた店内のあちこちから
娘たちのいびきや寝息や愚痴が漏れて来る
中には男の名を呼ぶうわ言やすすり泣きも

そういうわたしも
日々デリヘルバイトが命綱で
生きてゆくためだと割り切るしかない
昨夜は超変態おやじが相手に
体中べとべと舌で舐め回すから
死んだ方がましだと
吐きそうになりながら耐えた

ここはそんな命懸けで稼いだ金で
なんとか辿り着いたネカフェの一室

今はまだ夜明け前
なのに目が醒めてしまったら
もう上手く寝付けない
仕方ないから
ぼんやりと天井眺めていたら
不意に涙が込み上げて来た
生まれ育った安アパートの
あの天井を思い出したから

このまま朝まで
誰かのすすり泣き、聴いていよう
途方に暮れながら
ただじっと、震える膝
抱えながら、聴いていよう

ここは新宿歌舞伎町
ネオンも消えた大都会の闇の中の
ネカフェの一室
今はまだ、夜明け前
今はもう、夜明け前

(35) リンダあるいは

リンダあるいは

リンダあるいは
どぶねずみみたいに

今夜はきみに
辿り着けない雨に打たれながら
とぼとぼひとり街を歩いた

「どぶねずみみたいに・・・」
口ずさみながら

あれはリンダだったか
マリアだったか、あの歌の

きみのださい純和風のお名前とは
似ても似つかない
いかした女の子の名前

アベ、マリア
アベ、リンダ
アベ、そして

さいわいあれ、マリア
さいわいあれ、リンダ
さいわいあれ、そして

どれだけ雨に打たれても
それが降りしきる
その雨のしずくが
きみのいる街へと連れてゆく
いつかきみのいる場所へ辿り着ける
そんな雨ならば

いくらでも濡れよう
いくらでも濡れて歩いてゆける
どぶねずみみたいに

今本当におれ
どぶねずみみたいなんだ
ほんとうに

もしきみが目にしたら
いつもは泣きそうな顔したきみの目も
思わずおなか抱えて笑い転げるだろう

だけど今夜の雨は
きみに辿り着けない
限りなくきみには辿り着けない
ひとりぼっちの雨だから

ただこうやって
濡れて歩きたいだけ
今夜の雨は

アベ、マリア
アベ、リンダ
アベ、きみの名前
口にしようとしたら
震えていた唇が
今にも壊れそうになった

さいわいあれ、マリア
さいわいあれ、リンダ
さいわいあれ、

どぶねずみ、みたいに

そして今この雨に
おれ、というわたしと
いっしょに濡れる
同時代のあなたに

さいわいあれ

今夜はそして

やまないで下さい

今降りしきる雨の粒たち

どぶねずみみたいに濡れる

ひとりのわたしと

今夜は付き合っていて下さい

※詩中の歌は、THE BLUE HEARTS の『リンダ リンダ』です。

(36) 林屋の紀ちゃんが

林屋の紀ちゃんが

どうして林屋の紀ちゃんは
ジョーとのことをあきらめて
マンモス西と結婚したんだろう
そんなことをふと想いながら

ぼくはあなたのことを思い出していた
あなたといたあの時代のことを

昔あんなに不幸だと思っていたことも
十年二十年歳月がたつと
今ではこんなになつかしくて

どうして時が流れ去っただけで
どうして人はおとなになると
どうしてこんなになんでも
許せるようになるのだろう

なにかをあきらめてしまうことも
あきらめてゆく人のことも

どうして人はいつも
幸福ばかりを望んで生きてゆくのだろう
しあわせでいる方が
ほんとうはたくさん涙を流すのに
どうして人は

ぼくは不幸のままでもいいから
あの時代にいたかった
不幸のどん底でもいいから
あなたといたかった

寒くて毎日

ひもじい想いをしていた少年のころ
それでもいいからずっと
あなたといたかった
ずっとあの時代の中に
ひざをかかえていたかった

まだ白黒のTVの中のリングの上で
力石徹と矢吹ジョーがたたかっていた頃

ジョーとのことをあきらめて
マンモス西と結婚しようと
そんなふうにした
林屋の紀ちゃんがまだ少女だった頃

紀ちゃんがまだ無邪気に
雨上がりの公園のブランコにのって
毎日激しい練習にたえる
ジョーのことを想いながら

水たまりに映ったくもを見ていた頃

どうしてもぼくは
紀ちゃんにあきらめないでほしかった
どうしても

けれど紀ちゃんはマンモス西と結婚した
TVを観ながらなんだかぼくが
失恋したような気分だった

そして少女だった
紀ちゃんが去った後の
たそがれの公園で

あの日のブランコはまだ
雨上がりの風に
揺れていてくれるでしょうか
そっと静かにいまでも

少女だった林屋の紀ちゃんが
そっと静かにあきらめた
あの、想いをのせたまま

(37) 銀河の雨が降る夜に

銀河の雨が降る夜に

空き缶乗せたりヤカー曳いたおやじが
公園のベンチでしけもくに火を点け
青い空を見上げる頃

おれは息が詰まるネクタイ締めて
ラッシュの電車の中に
閉じ込められている
人身事故かなんかで
電車が5分止まったくらいで
いらいらしかめっ面で
ぶつくさ言っている
おれの遅れた分の給料どうしてくれる
重要な会議があるんだぞ
遅れたら責任とってくれるんだろうな、って
電車のドアに蹴りを入れる頃

リヤカーのおやじは
せっせとごみ収集場で空き缶を探しながら
そこに捨てられた子猫を見つけ
自分の食料、食べさせている
子猫がくたばってしまわないか
本気で心配している
泣きそうな顔して

(数行、空白が続く)

やがて巷に夜が訪れ
塾帰りの心を持たずに生まれてきたガキどもに
集団で殴られるのを
やっとの思いで逃げのびてから
血だらけの顔でそれでもなんとか守った
子猫の体温抱きしめながら

リヤカーのおやじが
しけもくに火を点けて
銀河を仰ぎ見る頃

おれはちかちかまぶしい
ネオンライトの放射能に曝されながら
ただきれいに着飾っただけの
おねえちゃんのケツを口説いている
リヤカーのおやじが汗だくで
血だらけになって命をかけた
一日分の稼ぎのその百万倍の金を
そして一晩で飲み屋のごみバケツに
騙し取られる頃

銀河の雨が
リヤカーのおやじの
血だらけのほっぺた洗い清めてゆく

うすよごれたネオン街を
血だらけの戦場を洗い流してゆく

リヤカーにはちゃんと
生きのびた子猫がかび臭い毛布に
くるまっている

あああ、家族が増えちまったな、と
うれしそうにリヤカーのおやじが
しけもくの煙を銀河へと吐き出す頃

おれは月7万も払って
子猫も飼えないマンションに帰る

雨にまじってどこからか聴こえてくる
リヤカー曳く音や
子猫の鳴き声をかき消すように

TVを点けて
そこに映し出されたニュースが
まだ作り話だと気付かないでいる

何の意味もないのだと
気付かないでいる

(38) 恋文

恋文

いつか
わたしが生きた一瞬一瞬に
手紙を出すことができたなら

過ぎ去ったあの
そのときどきの瞬間瞬間へと
もう忘れ去った

わたしのいた
確かにわたしがいた
それぞれの場所へと

いつか
手紙を書きたい
ひと言だけ
かきたい

「ありがとう」と

いつも
あきらめないでいてくれて
ありがとう、と

わたしから
わたしへの恋文

泣き叫びながらも
もがきながらも
生きることだけは
やめないでいてくれた

あの日のわたしへ

いつか
わたしが生きた
一瞬一瞬に
手紙を出すことが
できたなら

(39) うた

うた

目を閉じれば
潮騒が聴こえる

目を閉じれば
山の静寂が聴こえる

目を閉じれば
風の音が聴こえる

目を閉じれば
河のせせらぎが

降りしきる
横殴りの雨の音が

降り積もる
雪たちのささやきが

目を閉じれば
花たちの笑い声が

虫たちの
わんぱくなくいなみが

目を閉じれば
遠い星たちから降り注ぐ
光のしずくが
ぼくたちを包み込む音が聴こえる

真夜中目を閉じれば
売れないミュージシャンの歌が聴こえる

目を閉じれば
都会のざわめきが聴こえる

目を閉じれば
きみの好きだった歌が聴こえる
へただったきみの声で

目を閉じれば
夏の日差しと蝉しぐれが聴こえる

この星を愛している
だから、どこへもいかない

(40) 片思い

片思い

想い浮かばなかった言葉
うたわなかった唇
想い出せなかった顔
忘れ去った後の海のしおざい

想い出せなかった顔
けっして忘れた
おぼえはないはずなのに

どうしても
想い出せなかった顔、微笑み
その泣きそうだった微笑み

「だいすき」と
動かせなかった唇
「だいすき」と
いくら想っていても
心の中で何度つぶやいてみても
どれだけ「だいすき」だったか
自分でも気付かなかった心

女の子をデートに誘おうとする
瞬間にかぎっていつも
ラブソングをうまく口ずさめない

どんなにあなたのことを
想ってみても
あなたの面影はいつも
涙とひきかえにしか
浮かんでこなかった
まるで泣いたことへの同情としてだけ

多分それが
片想いの証拠だね

女の子をデートに誘おうとする
瞬間にかぎっていつも
しおざいの音を忘れてしまう

あなたを失ってからのぼくは
片想いがくせになってしまったよ

(4 1) 銀河の扉

銀河の扉

この夜のどこかに
きみがいるなら
確かにこの夜のどこかの場所で
今もきみが
ぼくを待っていてくれるなら

そして今はまだ
ぼくが生きていることさえ知らず
ただぼんやりと遠い星を見上げ
ひとりの夜を抱きしめているのなら

いくせんの夜を越え
いく数千の夜のやみの扉を
ひとつ、またひとつ
諦めることなくたたいてゆくよ
銀河の星のひとつひとつを
旅するように

たとえ無限のとしつきを費やしても
ぼくはきみを見つけ出すから

どんな小さな星
どんな小さな一粒の涙のかけらも
見逃すことなく
どんな小さな風、どんな小さなうた
どんな小さなため息も
聴きもらすことなく

今はあわてず
ゆっくりゆっくり歩いてゆくよ

もしも急ぎすぎて

きみを見つけ出せなかったら
銀河は永遠のやみへと
落ちてしまうから

今はこの夜のさびしさを
ひとつまたひとつ
ぼくの孤独な胸へと刻みつけよう

遠い時の彼方から押し寄せる
銀河の波のしおざいが
しずかにぼくたちの心へと
降り積もってゆくように

降り積もり
やがていつか必ず
ふたりは巡り会えるように

今はこのさびしさを
大事に育ててゆくよ

いくせんの夜を越え
いつかぼくたちが巡り会う時

ぼくがきみをきみだと気付くように
きみがぼくのことを
ぼくだとわかるように

そして一番最初にきみに
ごめんね、とあやまれるように

今はひとりでも
ちゃんと生きてゆくよ

(4 2) 星が泣く時

星が泣く時

星も泣くだろうか
この星の夜がしずかなのは
この星の夜がまっ暗なのは

時としてこの惑星も
ふと銀河系の果てに
ひとりいてみたい、と思う

太陽系の軌道はずれて
ふと

あまりにこの星の過去が美しすぎて
あるいはこの星の現在(いま)が常になしすぎて

ねえ
この、宇宙の、大宇宙の
どこをさがしても
きっと恋の存在する星は

あなた、しかいない
そんな気がしませんか？

そしてそれは
とても素敵な、ことだと思いませんか？

地球という名前は
誰がつけたのでしょうか

わたしならもっと
別の名前にしたよ
きともっと
あなたが喜んでくれそうな

恋する星とか
生命 (いのち) の星とか
ねえ、

星も泣くだろうか
この星も泣くでしょうか

この星の夜がしずかなのは
この星の夜がまっ暗なのは

人は単純な生きものだから
この星の涙といえば
雨だとか雪だとか
海鳴りだとか、想像するけれど

星が泣く時
この星が泣く時は
人知れず夜明けの空の薄明かりの下

まだ寝静まったぼくたちの街を包み込む
あの透明な青さ、だけが

この星の涙なんだよ

生命 (いのち) の涙がどんな生命であっても
涙が美しいことにはかわりはないように

この星が泣く時
この星のすすり泣きは
夜のしずかな暗闇の中で
わたしたちが眠っているすきに

こっそりと泣いている

(43) ふるさと

ふるさと

それは
夕暮れ間近の交差点だった
まだわたしが
小学校に上がる前の

反対側にいた
母の姿を見つけたわたしは
夢中で

信号が赤になったことも
気付かずに走り出し
車の急ブレーキの音で
我にかえった

泣き出したわたしを
心配そうに取り囲む
人々の前で
けれど母は
わたしをしかった

その時激しく
わたしをしかる母が
なぜわたしをしかるのか、
理解できなかった

あなたのもとへ
一秒でも早く行きたいと
願ったわたしを
心配してやさしいことばを
かけてくれると
思ったわたしを

けれど母は
激しくしかった
涙を浮かべながら
くりかえし、くりかえし
わたしをしかった

……ふと、
そんなことを思い出した
今あなたに抱きしめられた
夜のしじまの
ラヴホテルの一室

誰かにあいされた記憶
あいされていた
記憶があれば生きてゆける
どんなにしても
人は生きてゆける、
そんな気がする

それは
夕暮れ間近の交差点だった
まだわたしが
小学校に上がる前

あなたがわたしを
あいしてくれた場所が
わたしのふるさとです

あなたのふるさとが
わたしのふるさとです

たとえそこが
都会のネオン街の
さびれたラヴホテルの
一室だったとしても

あなたがわたしの、
ふるさとです

(44) 長距離トラックの運ちゃんど

長距離トラックの運ちゃんと

なんやラヴホテルの
すりガラスの窓に
ぼつぼつ赤い光が映って
それが映っては消え
さっきから映っては消え、するんで

ふしぎに思おて
おまえから離れ
窓を開けてみたんや

そしたらそれは
たいしたことない
目の前の高速道路を
走り去る車のライトに
すぎなかったんや

なんや流星かなんか、か思おたのに
そしたらそんな時
一台の長距離トラックの運ちゃんと
目と目がおうたんや

あっちはあっちで
チカチカまぶしい
ラヴホテルのネオンながめ
今頃ええことやりがって、なんて
思いながら通り過ぎてゆくし

こっちはこっちで
ただの車のライトを
流星かと思おたりしながら

幸せにしてあげたい

誰かを幸せにしてあげたい
おれら何のために
生まれてきたんや
おまえのことしんそこ
幸せにしてあげたい
おまえの肩を
ぎゅっつつかんで
そしたらそんな時

すりガラスの窓に
不思議な赤い光が映って
導かれるようにその窓を開けたら

ぐうぜん一台の
長距離トラックの運ちゃんと
目と目がおうて
そんな時おれ
その人のこと、ふいに
「にいさん」とか
呼んでみたい気分になったんや

にいちゃん、見てくれ
おれ今世界中で一番好きな女と
ここにふたりきりでいるんや

いいやろ、にいちゃん
いつかあんたと約束したな
いつか好きな女できたら
見せたる、て指きりしたなあ

ああ、わかっとなる
今おまえはそこで
世界中で一番ええこと、してるんやな

そこは人間が一番やさしくなれる場所
そこは大人が大人のままで
子どもに還れる場所やから

こうしておまえを抱いている間中

いったいくつ
流星がおれらの中を
流れていったやろ

それが銀河と同じだけの数になったら
おれらも銀河になれるやろうか

ここは人が一番
やさしくなれる
ここは大人が大人のままで
子どもに還れる場所やから

(45) 最後のハイキング

最後のハイキング

五月の風に誘われて
あなたと出かけたハイキング

新緑の森を歩き
草花に語りかけ

意外にあなたが花の名前を
知っていることに驚きました

静寂が支配する山の上の
小さな神社で手を合わせ
あの時あなたは
何を祈っていたのでしょうか

急な石段を降りる時だけ
わたしの手を引いてくれましたね

わたしたち
何年振りのことだったでしょう
ふたり手をつなぐなんて

それから小高い丘で
お昼のお弁当を広げ
あなたはおにぎりを
ご飯粒一粒残さず食べました

お昼が終わると
あなたはごろりと横になり
くもひとつないまっ青な空と
みどりの風に吹かれながら

いつしかふとった

あなたのおなかが寝息を立てて
せわしく、せわしく
動き出しました

どこからか舞い落ちてきた
一枚の葉がちょこんと
そんなあなたのおなかの上にとまって

あなたの呼吸といっしょに
動いていました
無邪気な子どものように

わたしはそっと
大事に大事に白いハンカチに
その葉を包んで帰りました

あれから
あなたがもう遠く
いなくなってしまった今でも

たった一枚の葉が
今でもちゃんと
思い出させてくれる

あなたとの、最後のハイキング

(46) ハッピーバースデー

ハッピーバースディ

誕生日がハッピーなわけ

どうしてバースディの上で
ハッピーが笑っているのか
どうして
ハッピー・バースディなのか

おしえてよ
おしえてください
生まれてからずっと
不幸せだったわたしに
どうかやさしくおしえてね

どうしてわたしが生まれたか
どうしてこの星が生まれたか
わかるくらいに

痛いほど響くあなたのこどうで

ある日見知らぬ女と男が
ある日どこかの街のかたすみで
めぐり会い恋に落ちた

ハッピー・バースディ
ときめきの中から生まれてきた、と
誰もがすべての罪と
すべての罰をも抱いて

わたしのすべてを抱きしめて
今ここにあなたの前に
わたし生きているから

ハッピー・バースディ
すべての傷と
すべてのにくしみさえ
分かち合うため

わたしたち
めぐり会ったように

そしてハッピー・バースディ
ここに生まれてきたことが
どこかの街を
あとにしてきたことなら

あなたとめぐり会うために
むかし誰かと
さようなら、してきたというのなら

やがてわたしたちが別れてゆくことも
新しいわたしたちにとって

ひとつのはじまりとなるでしょう

だからハッピー・バースディ
不幸せさえ幸福にかえてみせる

あなたとめぐり会ったわたしなら
あなたと出会うため
生まれてきた、わたしだから

どんなにかなしい時も
どんなに苦しい時も
誕生日はハッピー・バースディ、と
お祝いすることになっているの

いくつになっても
ハッピー・バースディ

(47) 木漏れ陽の中へ

木洩れ陽の中へ

わたしが鳥になったら
わたしの巣は
木洩れ陽のあたる場所に作ろう

わたしが子犬になったら
わたしのしっぽを
木洩れ陽が揺れるのにあわせて振ろう

わたしが野良猫になったら
一日中木洩れ陽の中であくびしよう

わたしというよごれたものさえ
存在することの許された
この世界と歳月

わたしが風になったら

わたしが帰る場所は
わたしが風になったら

わたしはいつも
木洩れ陽の中へかえろう

(4 8) 風の無人駅

風の無人駅

朝の電車で遅れたら次は昼
昼のに遅れたら次は夕方
それにも間に合わなかったら
また明日……。
ここはそんな田舎駅

暇だから駅員もいない
時より近所の年寄りたちが
ホームのベンチで
錆びた線路を眺めながら
日向ぼっこしているだけ

そして老人たちすら
いなくなったら
あとは草と風と
虫たちの駅になる

時より雨や雪や
潮の香りが訪れ
夜になれば
星も降り注ぐほどの
しずけさの中

風だけが
彼らにしか見えない
夜行列車に乗って
銀河へと旅立ってゆく

ここは無人駅
風の銀河鉄道

(49) マザーアース

マザーアース

それは
ひとりの少女のおでこ

そのおでこには
アフリカ
ユーラシア
ノースアメリカ
サウスアメリカ
オーストラリアの五つの大陸

それから、それから
そのほか小さな
たくさんの島々が描かれていて

その中では
小さな小さな動物たちや
植物たちが暮らしています

少女の鼻は
世界中のケーキのにおいを嗅ぎ
少女の口は
世界中のラヴソングを口ずさみ
そして

少女の耳はじっと聴いている
わたしたちの嘆き、
泣き叫ぶ声を聴いている
そして

少女の目は
じっと見つめている
いつもじっと

わたしたちが泣いている顔を
じっと、ひとりぼっちで

それは
ひとりの少女のおでこ

そのおでこには
太平洋
大西洋
インド洋

それから、それから
そのほか小さなたくさんの
海や湖があり
それらはみんな
少女の涙で満たされている

少女が泣く時
世界は雨に打たれ
少女が笑う時
空は晴れ
大地に清らかな風が吹いた

そして少女がひとみを閉じて
手を合わせ祈る時
街には純白の雪が降りしきった

それは
ひとりの少女のおでこ
地球という名前のおでこ

今日少女は
笑ってくれるでしょうか
それともやっぱり
泣いているでしょうか

そしてその少女とは
みんなのことです

(50) 見上げてごらん

見上げてごらん

ぼくの瞳に
銀河が映っている
きみの瞳にも
おなじ銀河が映っているよ

だから
銀河の星たちの瞳にも
ぼくたちは仲良しに
映っているだろうか
銀河の星たちは
いつまでもどこまでも
ずっとぼくたちが
仲良ししていると

信じていてくれるだろうか

いつまでもどこまでも
ぼくたちが仲良しだったことを
覚えていてくれるだろうか

そしてぼくたちが
仲良しのままいなくなったことを
知らないでいて
くれるだろうか

今夜も犬小屋の屋根の上で
いつものように
スヌーピーとウッドストックが
黙って星を見上げている

(5 1) 雨に消えた微笑み

雨に消えた微笑み

肩を濡らす雨に気付いて
傘を差すきみのため息が白く
星のない夜の空に消えてゆく

ぼくがなりたかったもの
きみの肩を包むレインコート
きみの肩に寄り添う傘

きみの肩に落ちた雨のしずく
ふときみがついたため息

傘も差さず大きな声で呼んだら
きみは振り向いて少しだけ笑った

なりたかったもの
ただしずかに降りしきる雨

きみがいなくなった後
きみの微笑み思い出すように
何度も何度も思い出すように
ただしずかに降りつづく雨に
なりたかった

(52) 傘にあたる雨粒の音

傘にあたる雨粒の音

雨が降り出す時は
すぐにわかる

雨の音で
窓ガラスのくもりで
行き交う人が開く傘の色で
駅のホームの灯りの
にじみ方でわかる

そして雨がやむ時はいつも
誰にも知られずやんでいる

人恋しくて泣き出した夜の
わたしの涙とおんなじね

誰かの顔を
思い出したのがうれしくて
泣いていたことも忘れてる

傘も差さずに雨の街を歩いている人と
雨のやんだ街を
傘を差したまま歩いている人と

どっちがほんとのさびしがりや、だろ
どっちが本当の弱虫だろ

雨と傘とはそして
どっちが泣き虫なんだろ

傘にあたる雨粒の音

もう雨はやんだのに

傘にあたる雨粒の音
まだ聴こえてる気がする

傘にあたる雨粒の音
まだあなたの足音、
聴こえてる気がする

(53) 祈り

祈り

銀河を見たよ

静かな夜明けの街を
夜行列車が走り去る

人はいつ
祈ることをおぼえたか
人はいつ自分以外の生命 (いのち) を
愛することをおぼえたか

銀河を見たよ
わたしのために
祈るあなたのひとみの中に

子どもたちの夢をのせて
静かな夜明けの街を

今夜行列車が
銀河へと帰っていったよ

(5 4) 天氣予報

天気予報

今日笑っている人を見た

幸福そうに恋人と手をつなぎ
はしゃぐように笑っている人を見た

今日泣いている人を見た

かさも差さず雨に打たれ
泣いている人を見た

けれど泣いている人は美しく
わたしの目に
笑っている人はかなしそうに見えた

涙のあとに
微笑みが待っていることと
微笑みのむこうに
涙が隠れていることの
どちらが幸福なのかはわからない

涙の中の微笑みと
微笑みの中の涙は
どっちがかなしい、か
比較するすべもない

今日笑っている人を見た
今日泣いている人を見た

昨日笑っていた人が
今日泣いていた
昨日泣いていた人が

今日は笑っていた

だから晴れ時々雨、雨時々晴れ

そしてわたしの天気予報は
今日も当たらない

そしてかみさまの天気予報は
今日も人類の平和と幸福とを語らない

今日も世界は晴れ時々雨
雨時々晴れ、でなく

雨時々土砂降り
土砂降り時々やっぱり、どしゃぶり

(5 5) 結婚相談所

結婚相談所

彼女は、結婚できなくても
いいんです、と言った

ただ毎日その日その日を
精一杯生きられたら
どんなことも
感謝で受け止めて生きてゆけたら
それで充分だと

だから
結果的にひとりでも
それはそれで
仕方のないことだと

ただもう年をとってきた両親が
いつも心配するので
少しでも安心させてあげたくて
ここにお任せしたから大丈夫だよって
言ってあげようと思って

今日ここにやってきました

それにしてもこのビルの
この窓から見える
新宿の夜景がきれいですね

あんまりきれいなので
さっきから見とれていました

こんなにきれいな
夜景の見える場所があったなんて

なんだかずっと
ここにすわっていたくなりました

なんだかこれから何度も
ここにきたくなりました

彼女は、結婚できなくても
いいんです、と言った

(56) はだか電球

はだか電球

銀河なる永遠と無限のまたたき
またその壮大な
宇宙交響楽のさびしさの中を
旅していたぼくが辿り着いた場所

三畳一間安アパートの
はだか電球の下

母はぼくを無理にひきとり
育てようとしたけれど
その願いは
ほんの数ヶ月で挫折した

その数ヶ月ぼくは
夕方仕事に出てゆく母を見送り
はだか電球の下で暮らし
眠りについた

母はそのうちすぐに
またしても男でしくじり、酒におぼれ

気が付くといつも
アパートのドアの前で寝ていた

ぼくを起こさないようにね

それからぼくがまた
施設に帰ってゆく日
母は仕事があるから駅に
見送りにはいけないと言い

ぼくに他に何もおみやげがないからと
はだか電球をひとつ持たせた

薄暗い夜行列車の中で
はだか電球は電気もないのに
ぼくのてのひらの中で灯っていた

ほおにあてると電気もないのに
はだか電球はあったかかった

うっすらと酒くさい母の
息のおいが、していた

(57) あなたの伸びた爪に

あなたの伸びた爪に

人々はもうあなたは
植物になってしまった、と言う

あなたの伸びた爪に
爪切りの刃先をあてながら

病室の窓に差し込む
夏の陽の目もくらむ眩しさの中で
介護に疲れ果てたはずのぼくが
一瞬の幸福に包まれている

爪の切れる音の
その一音さえいとおしく
部屋中に響く残響の
ひとかけらさえもらすことなく
ビンに詰めて取っておけたなら

いい笑い話にもなるだろう
いつかまたぼくたちが生まれ変わり
はじけるような若さの中で出会う時

あなたの伸びた髪に
ハサミを入れながら

この伸びてきた髪の本一本にまだ
あなたがぼくを愛してくれていることの
想いがつまっているように

伸びてくるこの
一本一本の黒髪が

まだ出会った頃の
娘のあなたにときめいた
あの胸の高鳴りを
やさしく思い出させてくれる

もう意識をなくした
あなたの伸びた黒髪に
ハサミを入れながら

病室の窓に差し込む
夏のたそがれの陽の中で

ひとりむせび泣き崩れ
こぼすぼくの涙にも
もう顔の表情ひとつ
変えることのないはずのあなたが

「あんまり短く
切り過ぎないで下さいよ」と

午後の風を使ってカーテンを揺らし
ぼくに囁きかけてくるようだ

なのに人々は、もうあなたは
植物になってしまった、と言う

(58) お風呂

お風呂

おやじは仕事がえり
雨の街でぼったり
見てしまった

娘が男に
ふられるところを
そして土砂降りの中へと
かさもささずに
飛び出した彼女の背中を

おやじは急いで
家に帰りつき
お風呂をわかし

それから彼女が
びしょぬれになって
ドアの前に立ったのを
確かめると

偶然そうに
そっとドアを開け
ひとことつぶやいた
「お風呂、わいとうよ」

(59) いたいの

いたいの

いたいの、いたいの、とんでけ

飛んでゆくはずはないとわかっていても
母は、母と呼ばれる人は
祈らずにはいられなかった

子どもの苦しげな寝顔
子どもが風邪をひいた日に一晩中

歳月は流れ
子どもは立派な娘に成長し
ある日激しい恋をして
けれどその恋は破れた

いたいの、いたいの、とんでけ

飛んでゆくはずはないとわかっていても
娘はこんな時あの晩のように
娘は、いつか自分より小さくなった母親に
また祈ってほしい、とふと思った

また歳月は流れ
年老いた母と、母になった娘と病室の窓辺

ここでもない、そこでもない、と
痛がったり、だだをこねたり
また、寂しがる母親のため
娘はつぶやいてみる

いたいの、いたいの、とんでけ

さびしいの、とんでけ

飛んでゆくはずなどないと

わかっています

わかっているけど

いたいの、いたいの、とんでけ

(60) 鏡の中のわたしへ

鏡の中のわたしへ

どうしてたの今日は
そう、きょうも相変わらず
平凡で退屈な一日だったようね

わたしの方も
似たようなものよ

相変わらず
眠い目をこすりながら
満員の電車に揺られ
ラッシュの人波の中を
かきわけ、かきわけ

やっと会社に辿り着いた時は
もう、くたくた

それからいつものように
タイムカードを押したら
かけ足で朝礼に滑り込む

あとはもう相変わらず
よくもまあ飽きないものだと
感心する位相変わらずの
判で押したような
一日が流れていくの

昼休みには近くの
バーガーショップに入って
同期の子たちと
ぺちやくちゃ、ぺちやくちゃ

ああでもない、こうでもないど

どうでもいい話を
えんえんとしゃべっていた

退社前珍しく
飲みに誘われたけれど
なんだかどんな店に入り
どんな話をして
どんなふう
時が過ぎてゆくとか
そんなことが
だいたい予想がついて
そんなことが今夜はなんだか
やけにいやで

さっさとひとりで帰ってきた

そしたらコンビニを出てから
へんな男に追いかけられ
やっとの思いで帰ってきたわ

だからさっき
あんなに息を切らしていたの
だからさっきあんなに
真っ青な顔していたの

それでも少しは
刺激になったかもしれない
無事に帰ってこれたらね

まあ

ざっとこんなところが
今日のわたしの一日

どう、
たいくつだったでしょ、ねえ

ひとり
つぶやいてみる

わたしに向かって

つぶやいてみる

鏡の中のわたしに向かって

「何か言ってよ」なにか、

こたえて下さい

何でも、いいから

それでも今日わたしは

「生きていた」と言って下さい

(6 1) キリギリスとアリ

キリギリスとアリ

アリたちは冬にそなえ
春も夏も秋もせっせと働き
食べものを巣の中に運びました

風に舞う桜を眺めることも
まぶしい夏の青い空や
白いくもを見上げることも
しおざいを聴くことも
秋の落葉の哀愁にひたることも
歌うこともせず

アリたちはただせっせと毎日
来る日も来る日も
冬の間食べものの心配をしながら
汗水流して働きました

そのころキリギリスは
春の桜のはかなさといとしさに
心をふるわせ
夏の青い空と白いくもを
少年のようにぼんやりとながめ
しおざいに生きることを問いかけ

それから秋の哀愁の中で
舞い散る落葉とともに
生命(いのち)のうたを奏でるのだった

そして冬が訪れ
生きることを問いつづけ
とうとう燃え尽きたキリギリスは
満足そうに笑みを浮かべながら

まっ白な雪の降る大地に倒れ
静かな眠りに就いてゆきました

その頃アリたちは
窮屈な巣の中で
毎日毎日ぼんやりと
ただ退屈そうに
あくびばかりしていました

いっぴきのアリが問いかけます
「わたしたちはいったい
何のために生きているのだろう」

やがてまた春が訪れ
アリたちのすることはやっぱり
冬の間の食べものの心配でした

春の日差しに雪がとけ
あのキリギリスの倒れた場所に
もうキリギリスの亡骸はなく
そこには一輪の花の芽が
顔を出していました

(6 2) 雨花

雨花

花が雨にぬれている
ひっそりと何もいわずに
ぬれている

どうめいなつめたい
まっすぐに
空からおちてきた
雨にうたれながら

何もいわずじっと黙って

傘も差さずに
傘を差すことも知らないで
くしゃみもせずに

しっとりと恋するように
いとしい人を想うように
今いちりんの花が
雨にぬれています

おしえてくれよ

ここが天国じゃないわけを
ここが地獄でもないあかしを

おしえて下さい
おかした罪をつぐなうすべを

今いちりんの花が
雨に打たれながら

雨にぬれたわたしを
じっと見ている

何もいわずじっと黙って

傘を差すことも知らないわたしを
傘をさしかけることも
知らない花が

※花は紫陽花でなく、ドクダミです。

(6 3) 星景色

星景色

いつも見上げていたはずの
おやじとおふくろの背丈を
いつのまにか追い越して
その分世の中のことも
見渡せるようなつもりになって

あんなに大きくて
眩しかったはずの世界も
今はただ薄汚れ
せこせこして醜い
人間たちの集団に過ぎない、なんて
悟ったような
ふうをしてみてもむなしい

今はただまっ直ぐに見上げる
灰色の夜空のむこうの星の瞬き
それさえも
いつか見下ろしたり
見渡したりする時はあるだろうか
例えば
この肉体を脱ぎ捨てる時

砂漠のような宇宙のまん中で
ただひとりぼっちで見下ろす
幾千万年の星の群れ、星の海は
どんな眩しさだろう
星々の奏でる潮騒は
そしてどんな寂しさだろう

星景色

夜空の星なら
ただいつまでもじっと

見上げているだけでよかった

(64) オキナワの雨

オキナワの雨

その新宿の高層ビルの一群の
栄華を誇る夜の瞬きが
されど妙に潮っ辛いのは

遠い海辺から打ち寄せる
あの子の涙で
出来ているからですか

首都圏に舞い散る
放射線の華びらと
携帯基地局より
発せられる電磁波とに
今宵も奴隷否
労働者たちが
被曝され続け
なければならぬのは

遠い海の街で
今も繰り返される
あの子の悲しみへの
無知なる故ですか

すべては計略否計画である
すべては委員会の
否日米政府間に於ける合意である
よって市民たちの抵抗とは
すべて無駄なる足掻きである

首都圏の市民殿に於かれては
ただ無知なるままに
眠っておいて頂ければよろしく
さあ

一時の春の夢をば召し上がれ

今遠い海の彼方から
あなたの耳には
あの子の悲鳴が
聴こえて
来ませんでしたか

その涙の一粒によって
首都圏の繁栄
わたしとあなたの
ぼくときみの
贅沢な一日が
今日も保たれているのだと
ぼくはいつ
気付きますか

その新宿の高層ビルの一群の
栄華を誇る夜の瞬きが
されど妙に潮っ辛いのは

遠い海辺から打ち寄せる
あの子の
涙で
出来ているからだ、と

そしてぼくはいつ
気付きますか

For Okinawan girls raped by U.S. soldiers

(6 5) 明日夜明け前に

明日夜明け前に

明日夜明け前に
ふと目を覚ました
おまえの枕もとに
しずかな風が吹いていたら

それはついさっきまで
そこにぼくがいて

じっと黙ってしばらく
いとおまえの寝顔をながめ

それから
目を覚まそうとする
おまえに気付いて
あわてて立ち去った

ぼくの残した
余韻のかけらだと思ってくれ

今日もぼくは軍に抵抗を続ける
少数民族の村にゆき

彼らの家に火を放ち
泣き叫ぶ子供たち
逃げ遅れた老人たちの姿を見た

或る家のすみに
それまで子供を抱いて
幸福そうに眠っていた
若い母親を見た
一瞬その姿が

おまえの顔と重なった

ぼくに気付いた、その女は

そのきれいなふたつの目が
ぼくに問いかけていた
どうしてこんなことをするの、
その目はそう叫んでいた

どうして、だって

なぜなら
おれだって
こうしなきゃ
おれが同じ目に
遭うからなんだ、と
答えるより先に
仲間がその家に火を放った

明日夜明け前に
ふと目を覚ました
おまえの枕もとに
しずかな風が吹いていたら

明日夜明け前に
ぼくは軍から
脱走することにしたよ

地雷の原野を越えて
ゆけるとこまでいってみるから

たぶん、これで
生きて
村に帰ることもないだろう
だから

明日、夜明け前に
ふと目を覚ました
おまえの枕もとに

しずかな風が
吹いていたら

それは
ぼくからの
さようなら、だと
思ってくれ

(66) 草のバイオリン

草のバイオリン

草の調べ、草の演奏
微妙に震えかすかに泣いて
時にはピーンと張りつめて

とがった鋭い草の葉は
吹きすぎる風さえ切ってゆく

昔切った小指の傷を思い出す

微風、強風
嵐、竜巻

南風、北風
海風、砂まじりの風
雨まじりの風
台風、ハリケーン

まだ止まらない
草の調べ、夢の調べ

一面の空と雲
長いふたつの耳を立て
一心に聴き入る影
いっぴき

草原のうさぎ
かじりかけのにんじん
地面にほうり

「これは
ドボルザークですな」

悦に浸り恍惚に我を忘れ
目を閉じて
薄っすらと涙さえ浮かべ

風に吹かれる
いっぴきのうさぎ
今、こそ泥に
にんじんをとられても気付かない

「食べ物より芸術さ」

今鉄砲が胸貫いても
鼓動はしばらく
止まらないだろう
その音楽がとまるまで

草と風の交響楽

「これは生命(いのち)の音楽だ」

そんなうさぎを
どこかで誰か見かけたら
どうぞぼくに教えてください

昔草の葉で切った
小指を舐めてくれた
お返しに

ドボルザークのレコード一枚
草原に置いてゆこう
かじりかけのにんじんが
落ちていた場所に

(67) 夜が明ける前に

夜が明ける前に

なんで人は
幸せになれないんだろ

かみさまは答える
罪があるから

罪をつぐなうため
それ相応の苦しみを
受けなければならない
その試練を乗り越えない限り
幸福にはなれないのです

なんで人は
幸せになれないんだろ

仏さまは答える
迷いがあるからじゃ

生まれてから
去ってゆくまでの間
人間は何年も何年も
同じ場所を
いったり来たりしているだけ
その迷いからさめない限り
永遠には辿り着けんのじゃ

なんで人は
幸せになれないんだろ

なんで人は自分より

不幸せな人を見ると
同情するんだろ

なんで人は
自分は幸せにはなれなくても
ほかの人の幸せを祈るんだろ

なんで人は自分は
幸せにならなくてもいいから
ほかの人を幸せにしたいと
願うんだろ

なんで人は
幸せになれないのに
誰かを好きになるんだろ

そうか
人はひとりじゃ
幸せには
なれないからなんだ

夜が明ける前に
もう一度だけキスして
夜が明ける前に

もう一度だけ

(68) 病名

病名

りゅうまち
はっけつ
あるつはいま
まらりや
せきり
こうげん
これら
あくせいりんばしゅ
ぱーきんそん
ましゃどじょぜふ
のうこうそく
しょうにがん
えいちあいぶい

みなまた

どうして病気にも
名前があるのだらう
どうして
こういう名前にしたんだらう

どうして人は
病気に名前を
付けたがるのだらう

いかにも重苦しく
響くことばを選んで

少しは楽になるためか
少しは気が楽になるからか

けれど

たとえば、ぎんが
たとえば、にじ
たとえば、やすらぎ
たとえば、きぼう

しずかに明日を夢見ることばは
ほかにいくつもあるというのに

どうして人は
病気に苦しそうな
名前を付けるのだらう

(69) ぼくたちの夢は死なない

ぼくたちの夢は死なない

たとえば歌が好きなら
歌うことが好きなら
歌が夢なら
歌うことがきみの夢ならば

たとえそこが
何万人の観衆のいるステージでも
そこがたとえ
誰もいない寂れた路地の裏側でも

歌は
何処でも歌うことができる
歌なら
同じ歌なのだから

その路地裏に
風が吹いていて
雑草が伸びていて
きみがそして
ひとりぼっちで歌っていて

やがてきみを含めた
すべての生命(いのち)が
生き変わり、死に変わり
めぐりめぐって

ある日
ふと何処からか
誰かの歌う声が出て
耳を傾けると

なぜだか無性に
きみは
その歌がいとおしく思え
近づいてみると

そこには
美しい花が咲き
ひとりの少年が立っていた

その花は遠いあの日
きみの歌を聴いていた、あの雑草
その少年はあの日
きみの歌を聴いていた、あの風

だから
ぼくたちの夢は死なない
きみの夢だった
あの歌は、死なない

(70) 海鳴り

海鳴り

あなたの罪を
いっしょに背負ってもええよ

いつでもここは
海が鳴いているから

仕事帰りの電車の中で
隣に座った
見知らぬ誰かの居眠りした頭が
あたいの肩にあたった時

ふとそんなふうにつぶやいた

ふとそんなふう
つぶやいてみた

あなたの罪をいっしょに背負って
あげてもええよ

いつでもここは
海が鳴いているから

ここは海の鳴く星やから

(7 1) 南荒尾駅で会いましょう

南荒尾駅で会いましょう

不思議な海が
目の前に広がる
その駅で、会いましょう
その時は、夏がいい

日中はほとんど
人が訪れることもない
その駅は

都会の雑踏の中で
人生のほとんど
全部を費やし
疲れ果てたぼくたちに
やさしい記憶を
くれることでしょう

干潟と呼ばれる
もしかしたら
海の中をどこまでも
どこまでも
丸で十戒のモーゼのように
海の果てまでも
歩いてゆけそうな

そんな海辺で
ひとりぼっちいつまでも
あなたを
待っていたかった

あなただけを
待っていたかった
少年から

老人になるまでの間

実際にやって来たのは

通り掛かりの
愛想の良い
おかつぼ頭の少女と
近所の
お喋りなおばあさんと
気の荒い
野良犬だけだったけれど

ぼくは
野良犬に追いかけられ
干潟の海を逃げ回った

この駅で
運命の人を
待っていたかった

この駅には
運命の人と
訪ねたかった

あなたとの記憶が
単なる記憶を超え
ぼくたちの鼓動にすら
なってしまうような
そんな
駅の静けさだから

夏の日射しが
やがて夕映えに変わる時
あなたの鼓動が
潮騒になってくれそうな
そんな海だから

あなたとは

南荒尾駅で会いましょう
あなたと
南荒尾駅で、会いたかった

(7 2) 波

波

わたしの心を
ひとつの海にたとえて

わたしの心がおだやかな時は
海を見にゆこう

わたしの心が荒れる時は
怒りの波、かなしみの波
にくしみの、それらの波が

それらの波も
いつかはやがてしずまり
ひとつの波が砕けちる時に
不思議にいつも心には
おだやかな波が
ほんの一瞬だけ吹いてゆく

それはあたかも
一種の風であるかと
さっかくしてしまう程に

教えてください
わたしの心も
ひとつの海ならば

いつかわたしの海を
見にゆきたい
いつかわたしの海に
たどり着けるでしょうか

教えておくれ

わたしという
ひとつの波が砕けちったあと
この世界の海に
新たに生まれくる波は

おだやかでしょうか
それは
限りなくおだやかで
あってほしかった

わたしの心を
ひとつの海にたとえて

いつか
わたしの海の波打ち際で
裸足になった
子どもたちが遊んでいる

きらめく波と
しおざいの中で
子どもたちが遊んでいる

わたしもいつか
そんな海に
なれるでしょうか

(73) 風鈴少年

風鈴少年

夏の夕暮れ時
風が吹いてくると
どこからか
風鈴少年がやってくる

わたしがまだ
少年だった頃

わたしの夢や
好きだった少女の笑い声
わたしの泣きべそ顔を
知っている

うつむいた
わたしのほっぺた
のぞき込むようにして
吹きすぎていった風

夕立の後のしずけさ
蚊取り線香のけむり
夏祭りのざわめき
夜市のランプの
波にまぎれて見失った
浴衣姿のあの娘の背中

気が付くといつも
風鈴の音がしていた

けれどそれは
風が吹いていただけ
ただ風が吹いていたから、
なのだと気付くには

まだわたしはあまりに
子どもだった

夏の夕暮れ時

やさしい風が吹いてくる頃
どこからかやってきた
風鈴少年

(74) テネシーワルツ

テネシーワルツ

おもちゃの赤いピアノ

貧しい家の母親は
かわいい娘のために

ほんとうは
黒い立派なグランドピアノ
買ってあげたい気持ちを

その赤いおもちゃの
ピアノにたくして
買い与えます

そのおもちゃの鍵盤の
一音一音に祈りをこめて

どうかやさしい
心のきれいな女の人に
育ちますようにと

小さいうちは
たしかに夢中で
遊んでいた娘も

けれど年頃になり
いつかおもちゃの
ピアノにもあきて

ピアノの買えない
貧しい家を嫌い
さっさと街へ出てゆきます

それから
何年も何年も
歳月が経ったある日

母親の危篤の
知らせをきいた娘は
急いで子どもを連れて
帰ってきました

彼女は
家の押し入れの中から
もうすっかり
ほこりかぶった
あのおもちゃの
赤いピアノを見つめます

そして彼女は
母親の枕もとで

歌などろくに知らない
母親が
たったひとつだけ
口ずさんでくれた

テネシーワルツ、弾きました
そのおもちゃの
赤いピアノで弾きました

(75) チュウインガムの少年

チュウインガムの少年

ひっしで女を口説くために
女のいいなりになる
大人の男の姿を見ては

あんなの下らねえやと
吐き捨てていたはずの少年たちも
いつか大人の男になり
背広やらネクタイやらシャレて

サラリーなど稼ぎ出し
クレジットカードを持ったり
酔っ払って電信柱にからんだり
厚生年金を払ったりする頃になると

やっぱり少年たちも
あんな下らない大人の男に
なってゆくだろう
それから身長や学歴や
年収で相手を選ぶ
そんな下らない女たちを
ひっしで口説き落としては
はしゃいだり、仲間に
自慢したりすることだろう

きみたちが
好むと好まざるとに関わらず
きみたちが男である限り
それを決して拒むことはできず

そしてそうやって
段々と現実に打ちのめされ
夢を失い、ひとみはくもり

いつかみんな、手に届くものばかりを
求めてゆくようになるだろう

そして誰もが
少年の夏の日にもっていた
少年だけがもつ、あの

やさしさを
なくしてゆくだろう

いつかある日
そんなきみの姿を
街で見かけた少年たちが
今度はきみに向かって
つぶやくんだ

あの頃のきみが、そうしたようにね
くわえていた chewing gum を
吐き捨てるように

おっさん、下らねえ
やつになっちまったな、ってさ

だから大人になんかなりたくない
だから年なんかとりたくない
つぶやきながら

そう、あの頃のきみが
そうだったようにね

だから死にたい時は
海にいけ
ひとりぼっちで
どうしようもなくさびしい時は
海を、見にいけ

(76) 少女へ(夏)

少女へ (夏)

わたし
あなたから
生まれてきました

それはあなたがまだ
夏服もぎこちない
中学一年の夏の教室の片隅

クラスのみんなが
ひとりの無口な女の子を
取り囲んでいましたね

あなたは最初
知らない振りをしていた

けれど彼女へのみんなの攻撃は
日増しにエスカレートしてゆき

ある日誰かが
彼女のセーラー服を
脱がそうとしたので

とうとう
たまらなくなったあなたは
席を立ち
勇気を振り絞って

みんなに向かって言いましたね
その瞬間から今度はあなたが
標的にされることを覚悟しながら
「もう やめてよ」と

その時この世界の
遠いどこかの樹の下で
いっぴきのせみの幼虫だった
わたしのかたい殻に

あなたの方角から
やさしいひとすじの光が差して
殻はやぶれ
その瞬間わたしは
思いきり羽根をのぼし

あなたのいる
この愛に満ちあふれた世界へと
飛び出すことができたのです

そしてわたしはあなたと同じ
この世界の空気を吸い
あなたと同じ
この世界の太陽の光を受け
あなたと同じ
この世界の風景を眺め
あなたと同じ
この世界の音に震えながら

あなたと同じひと夏を
生きることができたのです

あなたの愛につつまれて

わたし
あなたの涙から
生まれてきました

(77) 海に触ってみた

海に触ってみた

海に触ってみた

くすぐったそうに
海が笑い返した

海に触ってみた

降りしきる雨のタッチで
海が
冷たいね、と言った

海に触ってみた

夕陽が当たって
きらきら光るところ
そこがわたしの
ほっぺただ、と
海が教えてくれた

海に触ってみた

水平線を
ゆっくりと渡る
船の感触で

遠くに行きたいって
つぶやいたら
海が
わたしもだ、と答えた

海に触ってみた

くすぐったそうに
海が笑ってくれた

ほおに落ちる涙で
海に触ってみたら

わたしの子ども
そんな所に
隠れていたんだね、と
海が笑った

世界中で
一番の泣き虫は、海です

(78) あこがれ

あこがれ

ただ、美しい
人でありたかった

夜明け前
夢とうつつの
境界に打ち寄せる
歌か波か区別のつかない
遠い汐の音に似て

しずかに消え去る
星のまたたきに似て

ただ、美しい
現象でありたかった

(79) グリコのおまけ

グリコのおまけ

男の子は
道端にいたせみをひろいあげ
まだかすかに動いている
そのせみをてのひらに抱きしめ
じっとそこに突っ立っていた

強い夏の日差しの中を
また夕立の中でずぶ濡れになりながら

そしてせみが
動かなくなったのを見届けた後
男の子はそっと樹の陰に
せみをかえした

強い夏の日差しを忘れ
雨のしずくに濡れることも忘れ
ある夏の日はこの星のどこかで
ひとりの男の子と
いっぴきのせみがめぐり会い
そのひと夏の
一日のわずかな時を共有し
見つめ合い、語り合い
ふたつの生命(いのち)は生きた

別れゆくかなしみの涙も
永久の別れや孤独のつらさも
この星の上で
きみに出会ったことの
よろこびにくらべれば

みんな、グリコのおまけにすぎません

きみを好きになったことの
いとしさにくらべたら

(80) 夏の記憶

夏の記憶

あの日枯葉剤をあびながら
ナパーム弾の中を手をつなぎ
裸で逃げ回った、ぼくたちの夏

あれから時は流れ
ふたりは結婚し
きみはぼくたちの、子供を産んだ

そしてその子は今
小児病棟の
ホルマリンの中で眠っている
やすらかに

遠い夏の日この大地の中で
いったい何が行われたかを語る
ひとりの生命(いのち)として
おそらくは永久に、眠り続ける
そのホルマリンの中で

ぼくたちがなくなったあとにも
いくせんの人々に
そのことを語り続けながら

失われたぼくたちの夏
奪われたぼくたちのほほえみ
やっと少しだけふくらみかけた
きみの胸のかわいらしさを
まぶしそうに見ていた少年のぼくと
ぼくが少しでも
他の女の子と口をきいただけで
やきもちをやいた少女のきみ

そんなぼくたちの夏
永久にうしなった、
ぼくたちの夢

けれどまた
この世界に国に街に
ジャングルに海に河に
夏はやってくる
それでも夏はめぐり来て

夏がくるたびぼくは
とりつかれたように
あの日失った
ぼくたちの夏をさがそうとして
狂ったようにジャングルを駆け回り

きみはきみで
今でも怖い夢にうなされては
真夜中に悲鳴をあげた

そんな時ぼくは
おびえるきみの
もうしわくちゃになった
その手を
力いっぱい握り締める
力いっぱい、そう
ふたりで逃げ回った
あの夏の日のように

そしてやさしく語りかける
きみが再び眠りにつくまで

何度も何度も
語りかけるんだ
「おまえは、何も、わるくない」と

あの日枯葉剤を遊びながら
ナパーム弾の中を手をつなぎ

裸で逃げ回った、ぼくたちの夏

そしてまた
夏はやってくる

せまい標本の
ビンの中で眠る
あの子にも
夏はやってくる

それでも時より
まぶしい夏の日差しが
あの子の体に差し込む時
一瞬
笑ったような表情を
見せてくれることもあるだろう

おとうさん、おかあさん、と
ぼくたちに、笑いかけるように
いつまでも、いつまでも
ぼくたちにやさしく
いつまでも、いつまでも

傷ついたぼくたちを
かばうように

※アメリカがベトナム戦争で使った枯葉剤による、奇形児の悲劇です。アメリカだっ
さんざ、悪いことばっかやって来たんですよ。って今もか……。

(8 1) 夏の木漏れ陽

夏の木漏れ陽

木漏れ陽だけが
知っている
忘れられたバス停留所
忘れられた道

木漏れ陽だけが
覚えている

その失われた
道のむこう
廃れた家々に刻まれた
人々の吐息

木漏れ陽だけが
そして残された
いつの世も
失われた夏の形見に

人々が
思い出そうとして諦めた
遠い夏の記憶

昔
おいら石ころだった
ぼくは葉っぱ
わたしは土だったの

いく歳月いく数千年
繰り返す夏の中で
それでもわたしは
何らかの生命(いのち)の形をして

いつも
夏の一部だった気がする
いつも
夏の一部でいた気がして

木漏れ陽は

夏の木漏れ陽なら
夏の木漏れ陽の中で

汗にまぎれて
しずかに泣こう

(8 2) 宝石箱

宝石箱

時は宝石箱
春も夏も秋も冬も
今この一瞬の中に
つまっているから

心も宝石箱
よろこびもかなしみも
さみしさも幸せも
やっぱりぎゅっと
つまっているから

空は宝石箱
青空と夕焼けと星と
雨と雪を降らす雲と
そして虹を
持っているから

地上も宝石箱
花も草も木も
虫も鳥も獣も人間も
みんないるから

きみの顔は宝石箱
笑顔の中にいっぱい
涙を隠しているから
唇は歌を口遊み
瞳の奥には
海も隠れているから

(83) ずぶ濡れの野良猫

ずぶ濡れの野良猫

抱きしめてあげる
大丈夫
俺も濡れているから
土砂降りの中で
あっためて、あげる

大丈夫だってば
俺だって泥だらけ
傘を持たない者同士なら
仲良く、やれるさ

(84) ピエロ

ピエロ

人生なんて
お芝居に過ぎないと
知っている人は
人を笑わせるのが好きさ

死んだら帰る場所は
みんな、それぞれ
それぞれの旅に出るから

人生は
取り返しのつかない冗談だと
気付いた時から
ピエロになりたい

顔で笑って、心で泣いて
顔で笑わせて、
心で泣かせたい

そんなピエロに

人生は一瞬の夢

(8 5) 引き潮

引き潮

わたしが死んでも
誰も悲しまない生き方で
歩いてきたから
嫌われ者、憎まれっ子で
いやな奴！
あんなの、さっさと
死ねばいいのに、ってね

おかげで
誰にも辛い思いをさせずに
済みそうだ

だから
何も心配することはない
だから
こんな生き方も
悪くないよね

誰かを泣かせる位なら
誰かを笑わせて死にたい
そんな生き方も
悪くないだろう……。
そう、地球に問いかけて見た

わたしが死んだ後も
ずっと生き続ける地球
ずっと
回転し続ける地球へと

いつか
わたしの死させ
受け入れてくれる

この星に
問いかけて見た
ただ、問いかけて見た

満天の星の中で
今もこの星が
回っているとわかる

どうして
回り続けているか
わかる気がする

誰かが死に
誰かが泣き出す
誰かが生まれ
誰かが笑い出す

満天の星の中で
今もこの星が
回っているとわかる

(8 6) 地動説

地動説

この星が
回っているということ

朝ぼくが目を覚まし
夜またぼくが
眠りにつくということ
その平凡な
日常の繰り返しの中で

またいつかぼくは去り
またいつかぼくは生まれ
またいつかきみと別れ
またいつかきみと巡り会う
その永い永い歳月の中で

この星が
回っているということ

晴れていた空が曇り
雨が降り始めること
雨が上がり
また空が晴れること
そんな繰り返しの中でも
時には空に虹もかかり
生命は生まれ
そして
ある晴れた夏の日の午後に

いっぴきの蝶が一輪の花に
そっとやさしくとまること
蝶の羽根はやがて落葉に変わり
花は枯れ雪の下に眠る

それでもこの星は
回っているということ

さっきそこにいた野良猫が
風に吹かれ
どこかへ行ってしまうこと
けれどまた風に吹かれ
ふらりと
どこからかやってくる

親の面倒をみるために
結婚などしないと
言っていたひとり娘が
誰かを好きになってしまう

それでもこの星が
回っているということ

誰かが好きだった海へも
行かなくなったり
好きだったうたを
唄わなくなったりすること

夢を忘れ
平凡なおとなになったりすること

そのよろこび、かなしみ、
にくしみ、ざんげ、
こうかい、やさしさ

そのうちに
あと数十年もたてばすべて消え
失われゆく
それらせつな、せつなの現象を
大切にのせて今も

この星が
回っているということ

少年時代ぼくに
この星が回っていることを
教えてくれた人は
たくさんいたけれど
それはそう教科書に書かれていて
だれもが学校や本を読んで
そんなふう勉強したからで

けれどぼくたちも
いっしょに回っていると
気付いていた人は誰もいなかった

みんな忙し過ぎたから
生きてゆくことで
精一杯だったから

ほんとうはだれも
ほんとうはね
この星が回っているなんて
だあれも、信じていなかった

(87) エスカレーター

エスカレーター

人波から少し離れて
エスカレーターの
一番後ろに乗るのが好きさ
人込みの中で
わざとゆっくり歩くのも

何人の人と
ぶつかるか数えながら
何人の人と
ぶつかったら
きみに会えるだろう

東京で暮らす人の数だけ
ぶつかれば会えるかな
でもおんなじ人と
ぶつかったりするから
やっぱりきみには
会えそうにない
……都会なんて、そんなものさ

男は
好きな女の子がいないと
詩が書けない
詩人はたえず
誰かを好きでいなきゃ
詩が書けないから

きみに飽きた後
ぼくは
誰を好きになろう
そもそもきみに
飽きたりするかな

きみの後に
誰かを好きになれるかな

だからぼくは
詩人になるのを諦めた
もう詩なんか
書けなくていいから
ずっと
きみを好きでいるから
多分、好きでいるから

エスカレータの
一番後ろで
何度も振り向いている
やつがいたら
何度も何度も振り返って
きみを
捜しているやつがいたら

ぼくだと思ってくれ
エスカレータの一番後ろで

(8 8) ひみつの国

ひみつの国

その子は
誰からも相手にされず
いつも
ひとりで遊んでいた

そうしているうちに
その子は
ぼくたちには見えない世界が
見えるようになって

鳥や花や虫たちと
話ができるようになった

空気中にただよう
微生物の姿さえ
見えるようになり

それどころか
すべてのものに
感情があることを発見し

そうなると
いつでもどこにいても
毎日楽しくて
しかたがなくなり

その子はもう
ひとりでいても
さびしくなくなって
いつもうれしそうに
笑ってばかりいた

けれど誰もその子に
どうしてそんなに
いつも楽しいのか
そのわけを
聞こうとはしなかった

みんなその子のことを
ただのへんな子だと
思っていたから

そしてその子はその子で
「また変なこと言ってる」と
言われるのがこわくて
誰にも内緒にしていたから

そうやって
ずっと今まで
ぼくたちのすぐ近くにある
大切なひみつの国は
守られてきたのです

お金にしか
興味のない人たちには
とても
信じてもらえないけれど

(8 9) 九月に渋谷の

九月に渋谷の

九月に渋谷の風俗店で
女神に会った

家なき者を追い払った
宮下公園にも
彼岸の華は咲くのですね

天国ですか、それとも地獄
ここは
いいえ、東京都渋谷区です

東横線の渋谷駅に
切符もなしに入ろうとして
自動改札機に遮断された

実はその晩
そのホームから
飛び降りるつもりで
いたのだけれど
その前にどうしても
無性に女に会いたくなり
誰でもいいからと

つい渋谷の風俗店に入ったら
そこにわたしよりもっと
かなしい目をした風俗嬢がいて

わたしは金で彼女を
買ったことへの罪悪感に
苛まれつつ店を出て

そのまま人波に揉まれ

ぼんやりと切符もなしに
東横線の渋谷駅の
自動改札を通ろうとしたのです

そしたら
けたたましいブザーとともに
行く手を阻まれた

あたかも誰かに
叱られたような気がして
はっとして
わたしの目は覚めました

九月の渋谷の
風俗店の片隅で
救いの女神に会った
九月に渋谷の

夜のネオン街に消えた
あの日のわたしを
だからもう
さがさないで下さい

(90) さようならをするために

さようならをするために

波止場にひとりたたずんで
来ない船を待っていたい
いつまでも待っていたい

そして
いつまでも、ひとり
待っていたい

さようならと港の関係

港には
さようならがよく似合う
さようならには
港がよく似合う

どれだけの人がいくど
さよならのことばをかわしたか

さようならと
港の関係を理解するために
わたしの涙は
まだ、足りないらしい

雨上がりの港に
傘を忘れてきた
雨がもう
上がっていたので
うっかり
忘れてきてしまった

雨上がりの港に
あなたからもらった

傘なのに
忘れてきて
しまいました

さよなら、といわずに
さようなら、といった

まんなかの「う」は
その一文字分、だけ
さよならを、遅らせるためと

わざと子どもっぽくして
自分の罪を
軽くするためと

むかし土曜日の夕ぐれに
いたずら小僧とかわした
さようならのまねして
その後に

じゃ、また、あした、と
いいなかった、から

さようなら、という
ことばのために
人類は言語を獲得した
人間は、話すことを覚えた

さようならをするために
人は、港をつくった

さよなら、とは言わず
さようなら、といたかった

せめて
あなたには
さようなら、と言いたかった

(9 1) ネオン街の雨宿り

ネオン街の雨宿り

どうして日本にきたの
ニホン、ニッポン
にほん、にっぽん

どうして

船できたの
フネ、ふね、で

わたしは船で
日本に来ました

わたしの答えは
これで、正しいですか
わたしの日本語、
変、ありませんか

ネオンのまぶしい
光をさけて
ネオンのあやしい
またたきを逃れ

傘も差さず歩く少女に
傘を差しかけ立ち話

二万
ニマン、エン
わたしは二万円、です

少女の指さすネオンライトの
ホテルの看板の文字が
やさしく雨にぬれている

ネオンのまぶしい
光をさけて
ネオンのあやしい
またたきを逃れ

いっしょに
雨宿り、
してくれませんか

どうして
日本に来たの
カネ、お金、オカネ

無邪気に笑う
少女のほおに降りしきる
ネオンの雨

傘も差さず歩く少女に
傘を差しかけ、立ち話

いかにも
それらしい客のふりを
よそおいながら

ただ少女の
ほおに落ちた雨の雫
そっとぬぐって
あげたかっただけ

(9 2) 雨の赤信号

雨の赤信号

赤い信号が
赤い車の
テールライトを停めている
助手席の少女はぼんやりと
降りしきる雨を見ている
ぼんやりと
鼻歌でも口ずさんでいるのか

赤い信号の灯りが
ブルーライトに変わる時
動き出す
テールライトの波また波
それきり
少女は口を閉じたまま

せっかく数えていたのに
雨の数、数えていたのに
いくつだか忘れてしまった

あんまり突然
赤から青に信号が
変わってしまったから

かぞえていた
あなたの涙の数
かぞえて、
いたんだけどなあ

こんな夜は
人恋しくありませんか
こんな夜は
人恋しいって

言ってくれませんか

かぞえていました
あなたのため息の数
あなたの
さみしさの数

雨の信号機から
まっすぐに落ちてくる雨
ぼんやりと見ていた

こんど
赤信号でとまったら
こんどは百まで
ちゃんと
数えさせて下さい

あなたがいくつ
さみしいか
数えさせて下さい

雨の赤信号
まっすぐに落ちてくる雨

ぼんやりと見ていた

(93) 夢のカルーセル

夢のカルーセル

記憶はカルーセル

面影を乗せた木馬
忘れた頃に
またやってくる

涙はカルーセル

かなしみを乗せた木馬
引いてゆくよ
笑い顔の予感と引きかえに

人生はカルーセル

忘れていても
ちゃんと回っているくせに
知らないうちに、止まっている

人生は、夢のカルーセル

止まってはじめて
夢だと気付く

木馬の背中の
なつかしい、いたみだけが
残っている

(94) 与謝野晶子になれなかった

与謝野晶子になれなかった

まだぼくたち大人が
学生だった頃
歴史の授業で
第二次世界大戦を勉強した時

ぼくたちは
学ばなかったろうか
二度と過ちは犯しません、と
嘘っぱちの政治家と
マスコミには騙されまい、と

けれど今ぼくたちは
同じ過ちを犯してしまった
そして再びぼくたちは
政治家とマスコミに
まんまと騙された

竹槍でアメリカに勝てると信じた
あの頃の大人たちのように
今ぼくたちは
マスクやワクチンで
ウィルスに勝てると信じている

そして既に日本でも
1,000人以上の人が
ワクチンを打って死んでいるのに
それでもまだぼくたちは
騙され続けている
ワクチンとの因果関係は
不明です、などと
人をばかにしたような台詞に
何も感じないでいる

1,000人の人たちは犠牲者だ
人に感染させないために
打ちましょう、だとか
集団免疫のためにとか
そんなきれいごとや

みんなが打つから、とか
打て打てと言うから仕方なく、とか
そんな無言の圧力の犠牲者だ

あの頃特攻隊とか
人間魚雷として散った
若者たちとおんなじだ
あの頃隣組を気にしていた
大人たちとおんなじだ

そして打つ必要のない
子どもたちにまで
ワクチンを打たせ
未来のある
子どもたちも守れなかった
ぼくたちはただの
ええカッコしいの
他人の目と
外見ばかりを気にする
詰まらない大人の
集団に過ぎないのだ

ぼくたち大人が
まだ子どもだった頃
歴史の授業で
第二次世界大戦を勉強した時

どうしてあの頃の大人は
何も抵抗しなかったのだろうか
不思議だった
どうして
戦争なんかしたんだろう、と

でも今ならわかる
あの頃の大人は
今のぼくたちと
同じだったのだと

今だからわかる
ぼくたちは
あの頃の大人たちから
何も進歩していないのだと

もしもぼくたちが
あの時代にいたら
やっぱり何も抵抗せず
竹槍を握りしめていただろうと

与謝野晶子にはなれなかった
「君死にたまふことなかれ」
君、ワクチン打って
死にたまふことなかれ

ぼくたちは
いつになったら気付きますか
巧妙に仕組まれた
コロナとワクチン戦争の正体に

そしてぼくたちは
いつになったら声を上げますか
戦争反対、人殺し反対、と

(95) 戦争ゲーム

戦争ゲーム

戦争屋即ち死の商人にとって
戦争はゲームでしかない
戦場は市場(しじょう)であり
金儲けのための戦争ゲームって訳

どっちが勝とうが負けようが
彼らにとってはどうでもいい事
どっちに転ぼうが
どっちも彼らの商品即ち
兵器を買ってくれるお得意様

T Vから流れ来る戦場の映像を
あたかも
T Vゲームの画面の如く
虚ろな目で眺めているだけ
そこに響き渡る人々の
嘆きも泣き叫ぶ声も
彼らの耳には入らない
そこに映る人々の
血も涙もすべて
彼らには戦争ゲームの
ワンシーンでしかないのである

例えば今回の
ロ○ア対ウ○ライナの戦争だって
結局は彼らの商売のための
ビジネスショーに過ぎない

なるほどロ○アはロ○ア自身で
戦っているかも知れないけど
ウ○ライナの方は
米英の代理でやらされているだけ

だから米英の首脳陣連中なんて
所詮は傍観者
やっぱり戦争ゲームの画面の如く
報道番組の戦況を
自分らには関係ないって顔で
見ているだけ

ジェノサイドの件にしたって
なんてひどい、
かわいそうで見られない、
などとロ○アを非難
したりしているけれど
口先だけ
腹ん中じゃ何考えてるか
分かりゃしない

そして戦争ゲームの
臨場感溢れる大画面TVを
リモコンで消したら
彼ら死の商人即ち戦争屋には
今宵もお楽しみが待っている
ご馳走は勿論
ゴージャスなお姉ちゃんに
ワインですか？

彼らが憩(いこ)うスイートルームの
その純白の壁を
今も戦場で泣き叫ぶ
子どもたちの声が震わせはしない
子どもたちの血と涙の一滴すら
お洒落なタキシード姿の
彼らの足元に
飛び散ることは、ないのである

(96) 柿の木だった頃

柿の木だった頃

いつも山が見えた
田んぼが見えた
畑が見えた
小さな家が見えた

男の子がいて
女の子がいた
いつも
風が吹いていた

いつか
男の子も女の子も
大人になって
村を出ていったり
結婚したり

そしてまた
別の男の子がやってきて
別の女の子がやってきた
人も
ぼくから見れば
風と同じなのさ
人も、ただの風

ぼくが柿の木だった頃

少女の手に
柿の実を落としたら
少女は
柿の実にキスをした

柿の木のくせに
ぼくはドキドキした

すぐに年老いてゆく一生も
たまには悪くないな、と
思った
今度生まれてくる時は
少年になりたいとも、
思ったりしたさ

そして少女が
村の駅のプラットホームから
都会に出てゆくのを
いつまでも、いつまでも
見送っていた

ぼくがまだ
そんな柿の木だった頃

きみの本当の名前は
何ですか

本当のぼくは
何処にいますか

風だけが
答えを知っていますか

少女のキスの跡の付いた
あの柿の実を
あの日無邪気に
頬張った少年は
一体誰ですか

その時少女のほっぺたが
紅くなったことも
知らないで
そのわけも、気付かないで

ぼくがまだ
柿の木だった頃
いつも
風が吹いていた

(97) スレーブ人形

スレーブ人形

少女たちは
今日も歌い踊る

色鮮やかな衣装をまとい
眩しいスポットライトに
曝されながら
派手なメイクに
セクシーな表情
とろけそうな笑顔がたまらない
時には華やかに
恋のスクन्दル
なんてのも、ありかもね
そして気の利いた
大人のコメントで煙に巻く

だけどみんな
つくられたにせもの

少年たちは今日も
せっせせっせと労働に励む

汗水垂らし身を粉にして
朝からラッシュでもみくちゃ
昼はカップラーメン
夜は夜でサービス残業
今日も一日ストレス漬けてか

それもこれも
CD、チケット、写真集
その他もろもろグッズ集め
少女たちの慰めを手に入れるため

だけど棺桶に入るまで
少年たちは気付かない
自分たちが、奴隷だと

少女たちは
今日も歌い踊る

奴隷どもから金を巻き上げ
少女たちは
今日も稼ぎまくる

だけどそんな
彼女たちの食事は
今日も明日もコンビニ弁当
つまりは彼女たちもまた奴隷
ただの集客、
金稼ぎマシンに過ぎない

なのに今日も明日も
少女たちは歌い踊る

自分たちがスター、
アイドルだと信じて

放射線に汚染された
この華やかな
東京の空の下で

(98) ラストダンス

ラストダンス

きみと一晩だけ
ダンスを踊ったことがある

ダンスといっても
きみの体調が
あんまり良くなって
ふたりとも
少しも動かなかったから
正確にはダンスとは
呼べないかもしれないけれど

しずかにただ
じっと
きみがぼくのうでに
つかまっていたんだ
そして一晩中
星空の砂浜に
突っ立っていた

時々ぼくが歌ったり
きみが笑ったり
それからふたりとも
黙っている時は
しおざいがひびいていた

夜が明け
血相を変えて一晩中
きみを捜し回っていた
連中がぼくたちの
海岸にやってきて

みんなぼくに向かって

おまえは自分が
何をしでかしたか
わかっているのか、と
罵倒しながら
きみを連れ戻していった

あと余命
数日間しかないきみを
一晩中
連れ回しやがって、と

それからしばらくして
きみは
きみが一年中
横になっていたベッドから
ふいにいなくなり

彼らは誰もみな
そのきれいに整った
ベッドの白いシーツを
眺めながら泣き崩れた

きみはもう
どこにもいない、とね
この世界から
いなくなってしまった
つまりきみは、死んだ、と

だから
誰も信じようとしらないんだ
そのベッドから
いなくなっただけで
この世界がどれだけ広くて
世界中にどれだけの人が毎日
生きているかも知らないで

この世界
この宇宙と呼ばれる空間が
何千年何万億年
続いているかも知らないで

ただ
その小さなベッドから
きみが
いなくなったくらいで
ただ
その小さなベッドから
それだけで

きみは死んでしまった、と

でもほんとうは
ぼくだけは知っている
ぼくだけが知っている
ほんとうは
ほんとうに

きみは、生きている、と
いまでも
いまも、きみは
確かに生きている、と

例えば
このぼくの腕の中に
あの晩繰り返し歌った
あのぼくの歌の中に
例えば
あの星空の砂浜に
打ち寄せるしおざいの中に
星々のきらめきの中に

ぼくとあの晩の
海だけが知っている
ぼくたちだけの秘密として
確かにきみは生きている、とね

星の降る砂浜で
女の子と一晩だけ
ダンスを踊ったことがある
それから後の

ぼくのダンスの相手は
風だけ

(9 9) 深夜放送

深夜放送

そのラジオ局は
ラストバラードが終わり
DJがおやすみを告げたら
あとは夜明けまで

波の音を流した

深夜放送に
夢中の不良少年は
朝までのわずかな時間
ラジオから流れてくる
しおざいの中で
眠りに落ちた

夢の中では
決まっていた
ひとりの少女が現われ
けれどその顔は
ぼやけていて
その代わり少女はいつも

海のおいがしていた

そうやって育ったせい
今もラジオをつけると
しおざいが
聴こえて来る気がする

夜明け前に目を覚ますと
どうしてもつい
波の音をさがしてしまう
もう少女の夢を

見ることもないのに

あれからいつも
女の子と出会うたび
海のおいを
さがしてしまう

(100) きみはイマジンと歌うけれど

きみはイマジンと歌うけれど

きっと政治屋たちや
マスコミ屋なんかは
もうみんな知っているんだ
やがて国家なんか破壊される
国家なんて
ただの幻想に過ぎなかったのだと

だから彼らはもう
幾ら国民に嘘を吐いたって平気
全然問題なんかないって
思ってたよ

だから2,000人以上の人が
死んだって言っている
そんなワクチンを
未だに打て、撃てって
言ってたよな

戦争と言えば
国家間の戦いだとばかり
思っていたけど
第三次世界大戦と言えば
ロシア対アメリカ辺りの
核戦争だとばかり
思っていたけどさ
そうじゃなかったんだ

今世界中で
現在進行形で行われている
第三次世界大戦即ち
グレート・リセット

(コロナは序章に過ぎない……) は
世界規模での
統一世界を目指している連中

対

ぼくたち無力な民衆との戦争

ジョン・レノンは
イマジン、て歌ったけれど
おゝ、何という皮肉！

『イマジン』の世界を
あいつらパクリやがって
あたかもそれを
自分らの最終目標に
しちまった、というわけ……。

きみは
イマジン、と歌うけれど

天国も地獄もない……。
そりゃ世界中が地獄だけなら
天国も地獄もないだろ

天国も地獄も国も宗教もなく
従って神様もない
有るのは空と
たったひとつだけの世界だって？

その中でぼくたちは
所有することを許されず
ただ今日を生きている

偽りの平和の中で
奴隷という名の
仲間たちとともに
人類みな
奴隷という名の兄弟として

人類牧場或いは人類家畜小屋
そんな管理社会という名の
世界を分かち合いながら
と言うか
分かち合わされながら

天国も地獄も国も宗教もない？
有るのは空と
たったひとつだけの世界？

きみはイマジンと歌うけれど

パート 2

(1) おやすみメリークリスマス

おやすみメリークリスマス

都会の夜景はオルゴール
きらきら、きらきら、鳴っている

都会の夜景はメリーゴーランド
ゆっくり、ゆっくり、回ってる

子どもたちはもう夢の中
おやすみなさい、また明日

都会の夜景はクリスマスツリー
今夜も、明日も、クリスマスイヴ

おやすみなさい
おやすみ、メリークリスマス

(2) クリスマスツリーが終わる時

クリスマスツリーが終わる時

クリスマスツリーの電球の明滅を
見ているのが好きだった少年の頃

クリスマスが終わったら
クリスマスツリーも終わりだね
クリスマスは待っている時が
一番楽しくて
始まってしまうと何だか色あせた
きっともう終わる時のことを
考えていたんだよ
だから少しも楽しくなかった

宇宙も銀河も太陽系も
クリスマスツリーの
一部だったらいいのに
そしたら
クリスマスの終わりと一緒に
みんな、ぼくの押入れの中に
しまっしまえるから
宇宙の中のかなしみもみんな

クリスマスツリーが終わる時
街頭のクリスマスツリーに
雨が降る
雪にならない雨が降っている
少年のクリスマスツリーにも
雨が降っている
少年のひとみの中の
雨に濡れている

(3) 冬の弁当

冬の弁当

冬の公園で
少女が弁当を頬張っている
膝小僧震わせながら
唇だって震えているかもね

居場所のない者に
誰がやさしい
この世界の中で

これで雨や雪でも降ったら
あの子は一体
何処へ行けばいい

この世界に
居場所のない者のために
この世界に
居場所のない者は

生まれてきたことを
恨むしかないか
居場所もないのに
生きろ、とは
殺生でっせ神様
生きる、とは
居場所を探す旅ですか
この肉体という
重い荷を背負いて

ならば体は、からだとは
かなしみの
かたまりでしかない
持て余した

あまりにも不器用な

人は心だけですら
かなしみで
いっぱいだというのに

冬の公園で
少女が
弁当を頬張っていた
寄って来た鳩に
向けた彼女の微笑みが
あまりにもやさし過ぎて

凍えたわたしの魂を
救うのに充分でした

(4) ぼくが海なら

ぼくが海なら

死にたいきみへ

生きていたくないきみへ

もしもおれがきみの
心臓の鼓動なら

今すぐにでも
止まってあげたい

でもおれはただの
人間の屑だから

おれが海なら
きみの好きな夏の海でさ

そっときみを
つつんであげたい

生きもせず
かといって死にもせず

ただ
夏の空の下で
つつんでいてあげたい

おれがきみの、涙の海ならば

(5) 夜明けのカーセル

夜明けのカルーセル

降り積もる雪

カルーセルの屋根に
降り積もった雪を
カルーセルは吹き飛ばさずに

カルーセルは
じっと抱きしめながら回る
雪がとけるまで
雪がとけて
雨になって
カルーセルの屋根を
濡らしながら落ちてゆくまで

降り積もる夜

カルーセルの屋根に
都会の夜の欠片降り積もる
こわばった大人たちのため息が
恋に破れた女の子の泣き顔が
降り積もって

都会の夜のカルーセルは
いつも
静かに止まったままにいる
止まったままでいてくれる
X'mas にひとりぼっちでも
たいしたことないさ、と
笑っている

降り積もる笑い声

カルーセルの屋根に
子どもたちの笑い声
降り積もって

大人になった
子どもたちは忘れても
笑った記憶を忘れても

カルーセルは覚えている

子どもたちの笑い声
忘れるために
しずかに少しずつ
忘れてゆくために
そして今日も
カルーセルは、回っている

降り積もる、そんな
カルーセルの屋根に
ぼくは
きみの笑い声を
忘れて、きてしまった

回る回る、人知れず
回る夜明けのカルーセル
見ていると
子どもたちの
笑い声にまじって

きみの笑い声が
聴こえてきた
忘れたはずの
きみの笑い声も
聴こえた気がしたから

きみはもう
立派な大人の人なのにな

だからぼくは
泣くことも笑うことも
どっちもできずに
ただじっと見ていた

夜明けのカルーセル

(6) 交響曲第5番

交響曲第5番

マーラー交響曲第5番第4楽章の
第5番は
ボクシングの第5ラウンドという
言葉の響きに似ている
あくまでも言葉だけの話なのだが

「第5ラウンド矢吹が放った
テンプレートのフック
その時ダウンした際に後頭部を・・・」＊

それから力石を失った矢吹は
あてもなくいく日もいく日も街をさすらい
おそらくは地理的に近い
土砂降りの吉原のネオン街も歩いただろう

通りで誘うミニスカートの売春婦たちに
少しはときめいたりもしたろうか

それから再び泪橋にかえって
リングに立った時
顔面を打つことのできないボクサーに
豹変していた矢吹が

どうしてまた
相手の顔を殴れるようになったか
そのわけを思い出せない
どうしても思い出さない

口付けだけは許さなかった売春婦たちが
いつしか時の流れの中で
それさえサービスとして
受け入れていくように

なってしまったように

だからあまりにかなしいことは
思い出さないうちに
忘れたふりをするくせを覚えた

ただ今はもうマーラーの
交響曲第5番第4楽章を聴きながら
過ぎ去ったあの第5ラウンドの
いくどもいくども悔やみつづけ
何度も何度もよみがえっては
夢にさえうなされた

あのとえようのない後悔を
今は吉原のまばゆい
ネオンの海にすてよう
ここもまた戦場なのか
どんなにまぶしくまたたいていても
ここは

あの第5ラウンドの
リングを照らしていた
スポットライトに似て

どうもこの銀河系空間のまたたきは
どうしても救いの光というよりは
人々の流す涙のかけらである気がしてならない
やはりここは楽園ではなかったのか

それにしてもデジタル化された
コンパクトディスク上の交響曲は
いくど聴いてもすりきれない
すりきれない分だけ
よけいに過去も思い出してしまうので

いつもぼくは
マーラーの交響曲は
第5ラウンドしか
聴かないことにしている

その前もその後も
なかったことにして

あるのはいつも
第5ラウンドだけ
矢吹が力石を失った
あの交響曲第5番だけ

*TV「あしたのジョー」からの引用です。
マーラーの交響曲第5番をイメージしたんですけど、実は「第5ラウンド」ではなく、「第6ラウンド」が正解だったみたいです。聴き間違えでした。

(7) 手術を断って

手術を断って

幸福なわたしがわたしなら
不幸せのわたしもまたわたし

よろこびがわたしの一部なら
かなしみもまたわたしの一部

わたしのよろこび
わたしのかなしみ

ときめくわたしがいとしければ
もがくわたしもまたいとし

こころがわたしの一部分なら
こころの傷もまた
わたしの一部分だから

もしもこのいのちが
銀河系宇宙から
わたしへのおくりものなら

このいのちにたくして
銀河系宇宙が
わたしへと分け与えてくれた
生きるいたみもまた

わたしへのおくりものだと信じよう

そしてやがてこのいたみが
すべての宇宙の
いのちのいたみとひとつになる時を

しずかにわたしは待ちましょう

わたしがわたしらしく
ありのままのわたしのまま
生まれたままのそのままで

たとえば
朝の雨のひとしずく
雪のひとかけら
舞い散る落葉、花びらかき集め
ある日せっせとわたしという
ひとつのいのちをつくってくれた

このきよらかな銀河系宇宙へと
わたしがまた帰ってゆくその日まで

今朝
乳房摘出手術を断って

(8) マイホーム

マイホーム

安アパートに住むその夫婦は

休日になると
新聞のチラシ広告に載った
新築の家をめぐるのだった

電車で揺られ
駅から案内図にそって
ゆっくり、ゆっくりと道を辿り
家の前につくと

ふたりよりそい
子ども部屋はあそこで
ぼくの書斎は……
あそこに大きなベッドを置いて
ああじゃない、こうじゃないと

楽しそうに日暮れまで
ふたりはそうやっていつも
一週間分の夢を語り合うのだった
二人の間を過ぎ去っていった
一週間分の

あせとなみだ、いかりやぐちを
もう一度抱きしめ
抱きしめては尽きることも無い
ふたりの夢の中に
やさしくそれらを忘れゆくように
互いに許し合ってゆくように

そして住むことのないその場所を
ひとときの夢の空間を

暮れなずむ街を

もうすれちがうことのない
人々のざわめきの中を

またしずかに
とぼとぼと帰っていくのだった
いつものあの安アパートへ

わたしたちのマイホームへ

(9) カンパニー

カンパニー

夜空にまたたく銀河の光を
みんな涙の海にかえ
あなたに伝えよう

もう届かないあなたの心へと

いくすうせんの人々が
今も忙しく行き交う
夜の都会のネオン街は
さながら地上につくられた
銀河系のようです

あてもなく
そのまたたきを辿ってゆけば
どこかの星でまたあなたと
ばったり出会えそうな

そんななつかしい
銀河系のおいがして
思わず空を見上げると
薄暗い都会の空に
それでもやっぱり
銀河はまたたいていました

どうしてぼくたち
出会ったのだろう
いずれ時も空間も引き離されて
もう二度と永久に
再会することはないと
定められているぼくたちなのに

どうしてぼくたち

この銀河系のかたすみで
出会ったのだろう
何も知らずに
何も知らないもの同士だった
ぼくたちが

そしてどうしていっしょに
寄り添って歩いたりしたのだろう

銀河の歴史に比べれば
一瞬のまたたきにさえ満たない
歳月の短さの中を
あんなに夢中になって
子どもみたいに
泣いたり、笑ったりしながら

それでもぼくたちは確かに
この銀河系のかたすみで生きていた

夜空にまたたく銀河の光を
すべてみなぼくの涙の海に変え
あなたを抱きしめたい

今はもうぼくの涙はすべて
あなたへの感謝であふれていると
あなたに会えたことの喜びで

永久にこの銀河が続いてゆく限り
ぼくの涙はあなたへの想いで
いっぱい満たされながら

この宇宙のやみを
またたき続けてゆくと
銀河のまたたきに姿を変え
あなたを想い続けながら

だからいつかまたあなたが
ひとりの少女として
この星の大地に立つ時

目の前にあふれるほどの
銀河がまたたいていたら

それはすべてみな
ぼくの涙だと思ってください

すべてのまたたきが
あなたを愛していると

(10) つか王子様が

いつか王子様が

幾年月の時の闇の中に
そのあわただしく過ぎ去った
光と虹の彼方に
消えていった幾千万の夢たち
あるいは置き去りにしたままの想いの数々
けっして裏切ったのではなく
それでも

”いつか”はやがて
諦めの”いつか”に姿かえ
夢と現実との間には
もうゆききするすべのない
時の河が横たわり
やっと今鏡の中の年老いた
自分の顔に気づく

ああもう
おまえはこんなに
疲れてしまったのか
疲れるほどの恋をしたわけでも
歳をとるほど情熱を使い果たした
わけでもないだろうに

そんなに贅沢な願いを
していたわけでもなく
人並にと人並で構わず
ごく普通にありふれて
どこにでもいる、そこにもいる

ほら今私の隣を歩き去った
平凡な恋人たち
絡みつくように

寄り添うわけでもなく
周囲が眉間にしわを寄せ煙たがるほど
はしゃぐわけでもなく
けっして誰かを妬むことなく

ただ秋には枯葉が舞い散るように
冬には粉雪が降りしきるように
少しはなれて
寄り添う影であれたらいいと願った
その夢ともいえない夢さえついていた
夢が夢のまま
終わったことの潔さ
この世界の、冷酷なまでの穏やかさ

それでも今夜も
何処かの街の盛り場に流れている
「いつか王子様が」のピアノ演奏

そしてそれを耳にするのは
皮肉なことに私のような
王子様を待ちくたびれた女ではなく

目の前の王子様と向かい合う
チャーミングな女の子たちだけ

(1 1) 旅に疲れた心は

旅に疲れた心は

心が旅する海は
いつも嵐の中を
突き刺す雨に打たれ
いくつもの波に碎け散りながら

それでも心は死なない
海に飛び込んでも
心はすぐに浮かんでくる
ビルから飛び降りても
心はすぐに風になってしまう
たとえどれだけ血を流し
飢え渴き
息を止めても
それでも心は生き続ける
それでも心は残り、存在し
そして

心が旅する海はいつも
かなしみの地図でいっぱい
いつもおぼれそうになりながら
それでも心は
かなしみから逃れられない

人はいつも
空の青さや海の広さに
心引かれるけれど
人の心が本当は
空よりも青く、海よりも
かなしいことを知らない

人は宇宙の永遠について語るけれど
わたしの心がいくつ旅をしてきたか

わたしは知らない

旅に疲れた人は
体を休ませるけれど
旅に疲れた心は
いつもただぼんやりと
海を見ている

海が青いのは
空が青いからではなく
わたしの心が青いからです

しおざいが終わらないのは
わたしのかなしみが
永久に終わらないからです

もう永久に
終わらないからです

(1 2) 風

風

風が吹いてくる
やわらかな光が
ぼくを包み

潮騒の音や
鳥のさえずり
木々のざわめき
子供たちの笑い声が
聴こえてくる

子供たちは
羽根をなくした天使のよう
いつも
泣きそうな顔をしている

だから涙は
子供たちに任せておけばいい

永遠について
ぼくたちは語ろう

風が吹いてくる
清らかな星の光が
ぼくを洗い清め
涙さえ洗い流す頃

ぼくは星たちが
どうしていつも
あんな風にずっと
微笑んでいられるのか
そのわけを理解する

涙はいつか
洗い流されるもの

都会の人波が見える
咲き誇る花たちの姿
昆虫たちの様子
山や河の奏でる調べ
繰り返す時の流れが見える

たそがれの海辺でいだきあう
恋人たちが見える
そして
泣き叫ぶ人たちが見える
今も争いあい
傷つけあう人々が見える

気付かなかった
みんな、ぼくの一部

風が吹いてくる
さっき砂浜で
ひとりの少女の
長く伸びた髪や
そのほほに落ちていた涙を
やさしくなでていた風が

今はぼくの手をとり
ぼくをやさしく迎え入れる

永遠について
ぼくたちは語ろう

きみにいっぱい
話したいことがあるんだ

(13) リヤカーでお引っ越し

リヤカーでお引っ越し

リヤカーでお引っ越し
引っ越しなら、春がいい

ご近所に
六畳二間の家が見付かって
四畳半一間から引っ越した
リヤカーで家財道具一式
無事運び終えたら

いつも四畳半の
畳の上でひとりぼっち
膝抱え見ていたあの夢も
忘れることなく
空っぽのリヤカーに載せよう

そしてゆっくりゆっくり
歩いてゆこう
どこまでも
どこまでも歩いてゆこう

昔リヤカーで引っ越しした
引っ越しならやっぱり
春がいい
ぽかぽか陽気の春の日がいい

古びたリヤカーの荷台には
きらきらと
夢と春の陽のきらめきが
射していた

(14) 夕焼け雲

夕焼け雲

寂れた港町の
日暮れの中を歩きながら
今日も一日年老いてゆく

空には夕暮れの雲
あの雲の連なりの向こうに
あの夕焼けの彼方に
今も少年の日のわたしが
待っている気がしてならない

誰かを待って
放課後にひとり取り残された
教室の隅で
今ひざ抱え
あの夕暮れの雲を見ている
少年のわたしは

今こうして
寂れた港町の日暮れの中で
しずかに年老いてゆく
わたしのことを
今ひざ抱え、少年のきみは

こんなわたしをやさしく
そっと許してくれるだろうか
ほほにつたう涙に
夕映えをにじませながら

夢多き少年の日に帰る道は
この地上の
どこを捜しても見つからず

あるのはただ今日も
空に夕暮れの
雲の連なりだけ
歩いてゆくことの許されない
夕焼け雲の道だけ

寂れた港町の
日暮れの中を歩いていたら
ふいに、帰りたくなった
とぼとぼ、とぼとぼ
夕焼け雲の道でもいいから
帰りたかった

(15) 五月の自転車

五月の自転車

海を見たよ

降りそそぐ五月の日差し
あの頃はいつもひとりで

海を見たよ

長い坂道を汗かきかき
自転車押していた
きみはまだ少女で

ぼくには
その自転車の
さびたハンドルさえ
まぶしかった

駅前の駐輪場で
きみの自転車見かけては
ハンドルにこっそり
触れようとして
できなかった

五月生まれ
へえ、おんなじ
ただ少しぼくの方が
数年早かっただけ

海が見たいの

まだ一度も
見たこと、ないんだ

生まれてから、わたし

それじゃ今度の五月
今度五月が来たら
見にいこうよ
ぼくとふたりで、ね

でも
あなたの近くにいたら
今でもここが
海みたいな気がする

なんでだかわからない
わたし
目がへんなの、かもね

こもれ陽の差す
緑の風の中で
あふれるほどのまぶしい
若葉のにおいに
抱きしめられたら

今、一瞬
海が見えたの

ずっと思ってた
ずっと生まれた時から
ずっと
どこかにわたしを
思っていてくれる
人がいる、と

海を見たよ

あの日きみが見た海を

降りそそぐ五月の日差し
きみと歩いた坂道を今は
ひとりになって歩きながら

駅前の駐輪場に
さしかかったら
そしてやっぱり、きみのあの

さびたハンドルの自転車
さがしてしまったよ

もうこの街に
きみはいないのに

(16) 桜と白い仔犬と明日のために

桜と白い仔犬と明日のために

桜並木を
白い仔犬が駆けてゆく
満開の桜の花を
見上げながら

ふわふわとした
白い自分の
眩しさも知らないで

太陽は降り注ぐ
桜に
白い仔犬に降り注ぐ
今は春
すべてが夢
すべては夢と

やがて桜は散り
仔犬は桜の木の下で
じっと動かなくなる
眠っているように
眠るように

太陽は降り注ぐ
それでも太陽は
明日のために

(17) 人間だった日の記憶

人間だった日の記憶

わたしのふるさとは
あなたの弱さです

あなたの愚痴や不平不満
あなたの弱音、泣き言
狡さ、醜さ、卑怯、臆病、小心者
傲慢、我儘、短気、自己中、身勝手
弱虫、泣き虫、ため息
嘆き、足掻き、嫉妬、ショボさ
ダサさ、へたれ、負け犬、怠け者
そしてあなたの涙が
わたしのふるさとです

やがてわたしが人間でなくなり
この星の大地に帰り
この宇宙の大気中へと消え去る時に
なつかしく
ただ限りなく懐かしく
わたしが人間だったことを
いとおしく思い出せるように

わたしには
あなたの弱さが
わたしの郷愁です

(18) エイリアン

エイリアン

わたし、あなたに会いたくて
生まれてきました
あなたを見つけ出すために、この星に

だからあなたに会えなければ
わたしはただの異星人(エイリアン)です

(1 9) 夜の国道

夜の国道

昼間あんなに車のゆきかった
国道をもう今は

思い出したようにときより
ヘッドライトが通りすぎてゆくだけ
それにしてもそれは
アスファルトの道路に
押し寄せては引いてゆく
波のかけらのようでしかない

ラッシュどきあんなに人で
あふれかえった駅のプラットホームも
今は電気をおとし

エアポートに帰郷した
夜間飛行の旅客機も
傷ついた翼いたわる鳥のように
ゆっくりとたたずんでいる

耳をすませば路地裏に
ひざをかかえねむる
野良猫たちの寝息さえ
聴こえてきそうなほど

目を閉じれば目には見えない星々の
移り変わりさえ感じられるほど

今はやさしい
今はもう

どこか遠い水平線の彼方より

またたく船の灯りの明滅に似て

この夜というひとつの海を
子どもたちの夢と
つかれはてた大人たちの寝息を乗せて
渡ってゆく

街は一そうの船のようです

涙も笑いもかなしみも絶望さえも
ねむりの中に
みんなとけてゆくようです

泣いたカラスがもうわろた
そして泣いたカラスは、もうねむった

おやすみ、だからおやすみ
夜の国道

(20) 大地に耳をあて

大地に耳をあて

誰かが言っていた
遺伝子を組み替えられた花は
うたわないと

誰かが言っていた
クローンは、うたわないと

誰かが言っていた
ほんとうかどうかは
わからない

けれどもう一度
耳をすましてごらん
大地の中に突っ立って
そして風に吹かれながら

大地、大陸
この星のまん中で
ひとりぼっちで

大地に耳をあて

ほんとうに
花はうたっているか
花はうたっていたか

やがてこの星がすべて
遺伝子を組み替えられた
作物と植物とで
おおいつくされる時

ぼくたちは

うたうことが、できるか
どうか

その時ほんとうに
ぼくたちは、クローンではないか

この
大地に耳をあて

(2 1) オオカミ少女

オオカミ少女

それまでオオカミに育てられた少女は
オオカミの世界のテレパシーを使って
意思を伝達していた

だから少女に
言葉はいらなかった

オオカミたちの世界観の中で
生きること、存在すること
そして世界から去ってゆくことの
その生命の永遠を学んだ少女は
涙を知らなかった

その後少女は人間に発見され
人の中で育てられるようになった

少女はそして
言葉と涙をおぼえた
テレパシーと永遠を失った少女は
仕方なく言葉と涙をおぼえた

テレパシーを交し合う相手を失い
言葉しか使えない人間を相手にするために
少女は言葉を覚えるしかなかった

永遠の意味も知らず
ただ別れとかなしみに
泣くことしかできない
人間たちの中で生きてゆくために

少女は永遠を忘れ、涙を手に入れた

ビルとアスファルトと
偏見と騒音と
排気ガスと核兵器に囲まれた
都会の中で

(2 2) 花束

花束

どんなきれいな花束より
あなたの「さようなら」のひと言が
わたしには一番の花束です
花はすぐに枯れてしまうけど
あなたの「さようなら」は
わたしの中で
永遠に咲いているから
ありがとう
好きになってくれて
ありがとう
「さようなら」と
泣いてくれて、ありがとう

(2 3) 雪の夜の約束

雪の夜の約束

ぼくはきみを花と呼んだ
きみはぼくを風と呼んだ
直ぐに何処かへ
行ってしまうから

でも本当は
太陽と星になりたかった
昼は太陽になり
夜は星になり
この世界中を照らすんだ
ずっといつまでも
きみと一緒に

泣き虫のきみは雨
じゃポーカーフェースの
ぼくは砂漠？

それより海へ行こう
きみが海で
ぼくが砂浜
そしていつも
きみの涙を受け止める
きみの歌声を聴いている

雪が積もった冬の夜は
震えるきみを抱き締める
何処へも行かず
ずっときみのそばにいるよ、と
いつまでも
きみを抱き締めている
きみの代わりに泣いてくれた
雪を眺めながら

春になったら
また野を駆け回ろう
きみも風になって
そして疲れたら休もう
大地に寝転がって

きみはぼくの花
ぼくは
きみの大地に
なりたかった
だけどやっぱり、風

やがてきみを残して
ぼくが旅に出る時
旅に出た後
それでもぼくは
きみとの約束を果たすため

ほらやっぱり風になって
いつでも
きみの周りを回っているよ

だから
泣いてばかりのきみが
春の陽の中でふっと
笑いたくなったら

それは
きみの頬っぺたを
ぼくが撫でていったからだ
と
思ってください

(2 4) 死亡通知

死亡通知

おとうさん
家族に迷惑を掛けまいと
かあさんと離婚して
多額の借金とともに
姿を消したあなたは

行方不明だとか蒸発だとか
失踪者だとか呼ばれたまま
丸で犯罪者のように
陽のあたる場所に出ることは
一度もなかったのですね

昨日、日本の果ての
名も知らない町の役場から
あなたが亡くなったことの
通知が届きました

おとうさん
立つ鳥跡を濁さず、とは
あなたのような人を言うのですね

誰も皆人間であるならば
たった独りで
見も知らない何の宛てなき
この世と呼ばれた世界へ
生まれ来たかと思えば
何の因果か
たった独りで不幸を背負い
あなたはそしてまた
たった独りで、この世を去った

誰しも人間であったならば

誰かと寄り添い
寒い日は肩を寄せ合い温め合い
あったかなご飯を分かち合い
そして幾つもの沈黙を
幾つもの朝と昼と
夜とを共に過ごし、
たかったでしょう

あなたもまた
ひとりの人として
そうであった

そんな願いを
夢にも見たことでしょう
それが叶わぬ
夢と分かっているながら

薄暗い部屋の片隅で
そして夜明け前
あなたは
何を思ったでしょう
底冷えのする
すきま風にすら
話し掛けることもなく

おとうさん
死期を悟ったあなたは
僅かしかない荷物を
さっさと処分し
貸家の大家さんに
挨拶を済ませると
それからふらっと路頭に出て

その朝空き地の隅で
息絶えていたそうですね
丸で一本の草のように
丸で一枚の枯葉のように
丸で、一匹の野良猫のように
丸でそして
夢見る子どもが

笑みを浮かべるように

※参考文献『老後に住める家がない!』太田垣章子著

(2 5) 冲

沖

波に運ばれ
沖まで流される
浮き輪のように

まだ
あそこにいる
まだ、あそこ
ほらやっど
あそこまで

そして気付いた時
もう遥か
沖の彼方に消えている

誰かを忘れる時

沖は記憶の水平線
失ったものは
沖の彼方にある

時よりだから
波に押し返され
ふと思い出してしまふ

わたしの中にも
記憶を運ぶ波がある
遠い沖の彼方まで
わたしの中にも
海があつて

だから泣きたい時

わたしはいつも黙って
わたしの中の
しおざいに耳を傾ける

そして
遠い夜の海の彼方に
星が消えてゆく時

わたしはしずかに
あきらめる

(26) 遠い一本のバオバブの木へ

遠い一本のバオバブの木へ

きみはそうやって今日まで
ずっと大地に立っていたんだね
人間や動物たち
子どもたちの生き死にを
じっと見下ろしながら
こっそりと笑ったり泣いたり
そして絶望しながら
それでもやっぱりきみは
明日もそうやって
立っていてくれるんだね
遥かな天空を渡る風だけが
きみのため息を知っている

(27) 風と草の記憶箱

風と草の記憶箱

世界のどこかに
記憶の隠れ家がある
誰も知らない
記憶の隠し方
知っているのは風

風が草を揺らす時
記憶の一片(ひとひら)が
大気中に飛び散って

人はふと立ち止まり
懐かしさに、懐かしそうに
ほんの一瞬だけ
忘れた記憶の匂いを嗅いで
それから人はまた
何もなかったように
日々の暮らしの中に戻る

風が草を揺らす時
飛び散った記憶の集め方
人は知らない
掻き集め心に閉じ込めておく
術を持たない
ただはかなしげに
懐かしいと、つぶやくだけ

風と草の記憶倉庫
風と草の記憶箱
どうか
わたしという一片も
その中に

取っておいて下さい

(28) 住宅街の一角の安アパート

住宅街の一角の安アパート

通行人の足音、おしゃべり
学校帰りの子どもたちの鼻唄
聴くともなしに耳に入って

この場所も
たくさんの人が住み、生きている
住宅街の一部なのだと思います

どんなやつが住んでいるのかも
知られないまま
生きているのか、死んでいるのかすら
関心を持たれず
されど若い季節の数年間を
確かにわたしも生きていた
閑静な高級住宅街の一角にある
安アパート

隣の部屋には
貧乏だからと東南アジアの
四人家族が住んでいた
あの子どもたちは
今頃何処で何をしているだろう

真夜中ひとりぼっちで
すすり泣いていたわたしを
子どもたちの寝息が包んでくれた
あの住宅街の隅の安アパート

(29) 夜空の不思議、地球の不思議

夜空の不思議、地球の不思議

星たちは
本当はとっても離れているんだよ
でもね夜空を見上げる時
みんな仲良く並んで
瞬いているように見えるから
不思議
パレスチナの子どもたちにも
イスラエルの子どもたちにも
おんなじひとつの夜空なんだ

星たちの方からだって
おんなじなのさ
宇宙の片隅の
この小さな小さな地球にいる
子どもたちはみんな同じに見える
イスラエルの子どもたちも
パレスチナの子どもたちも
みんなおんなじ人間なんだ

だから夜空の星たちは
不思議で仕方がない
あんな小さな小さな星の上で
どうして人間たちは
地球の子どもたちを
殺し合っているんだろうってね

(30) 千年の孤独

千年の孤独

きみに会えない一日は
ぼくには千年の孤独
だからきみがぼくを強くする
どんな苦しみも耐えるし
世界の果てにだって行ける

きみに会えない一日は
ぼくには千年の孤独
その千年をきみは
どんなふうに過ごしたろう
みんなとわいわいガヤガヤ
素敵な一日だったらいいな
千年分のさびしさは
全部ぼくが引き受けて

きみに会えない一日は
ぼくには千年の孤独
とは言っても
ぼくだってそれなりに
楽しく過ごしていたから
心配はいらない

きみに会えない一日は
ぼくには千年の孤独
千年が万年になり
やがて十万、百万、千万年
そして一億光年の
孤独に辿り着く時
ぼくはきみを忘れられるかな
きみにやさしく
さようならが言えたらいいな

きみにもう会えない年月は
ぼくには宇宙の闇
いくつ星が瞬き
どれだけ風が歌いかけても
ぼくの唇は
ラヴソング口遊めない
もう永久に
ラヴソングは歌えない
永遠の沈黙の中に
ただ佇んでいるだけ

きみに会えない一日は
ぼくには千年の孤独
どうりで
さびしいと思ったよ

(3 1) 諦念

諦念

むずむず、こそばゆさに
目を覚ました
街の片隅、路上生活の
その幼い子どもは
自分の顔に
羽虫がとまっているのに気付いて
手で追っ払う

また別の虫が飛んで来て、とまり
また別の虫、また別の虫……
髪の毛、額、頬、鼻、頬、唇、顎、耳……
ぶんぶんぶん、さっきの虫も舞い戻って来る

払えど、払えど、切りのないことに
やがて気付いたその子は
払うのを止め、ため息を吐く

(3 2) 少女が虹を描いている

少女が虹を描いている

少女が空に虹を描いていた
色は七色で塗ってくれるかな
透き通るような青空にお似合いの

けれど少女の虹は灰色一色
丸で憎悪に満ちたケムトレイルみたい
何かつらいことでもあるのかな
この世界から
逃げ出してみたいのかな

少女が空に虹を描いていた
涙の色って何色だろ
少女の涙にも
虹が架かればいいのに
たとえ涙色の虹でもいいからさ

少女が空に虹を描いている
それでも少女が笑う時
空にはやっぱり
七色の虹が
架かっているほしい

(3 3) 水平線

水平線

ぼくが死んだら
ぼくはきみの太陽になろう
きみが地球で
ぼくが太陽になるってことさ

今水平線の彼方へと
太陽が沈んでいくけど
暗黒の宇宙の闇の中を一巡りしたら
またきみの前に帰って来るから

静かな夜明けを連れて
確かに帰って来るから
夜は愛を育む沈黙の時間

そして地球のきみは
ぼくの光をいっぱい浴びて
たくさんの生命を
地上に産み落とすのさ

きみの上でたくさんの生命が
今も生まれては死に
死んではまた生まれ来る

ぼくが死んだら
ぼくはきみの太陽になろう

だからいつかぼくが
水平線の彼方に沈んでも
決して死んだなんて思わないでくれ
明日また太陽が
きみの空に昇るように

(3 4) 膝っ小僧

膝っ小僧

どうして名前に
「小僧」が
付いてるか分かった

苦しい時
ひとりぼっちの時

抱き寄せて
泣きそうな
ほっぺ当てたら

やさしく
慰めてくれるから

(35) Mr ロンリー

Mr ロンリー

みんなひとりぼっち

きみも俺もひとりぼっち
草も木も花もひとりぼっち
蝶も蝉も蜂もひとりぼっち
野良猫もひとりぼっち
風もひとりぼっち

街もひとりぼっち
海もひとりぼっち
太陽もひとりぼっち
月もひとりぼっち
空もひとりぼっち
星もひとりぼっち

宇宙もひとりぼっち
かみさまもひとりぼっち

みんな
さびしいから生まれて来た
仲間が欲しくて
みんな
さびしさ、から生まれて来た

でも生まれても
やっぱりひとりぼっち
どんだけみんな
不器用なんだよ……涙

(36) 雪の日のカルーセル

雪の日のカルーセル

(一)

とまったカルーセル
もう動かない
カルーセル

きみを乗せた
カルーセル
ぼくの心の中でだけ
回り続ける
きみを乗せたまま

雨の日も
風の日も
雪の日も
晴れた日も

きみを乗せた
カルーセルは
止まっている

ただしずかに
止まっている
自分が
カルーセルだった
ことも忘れて

止まって
いてくれる

もう
笑いあうことのない
ぼくたちのために

カルーセルが
止まっている

とまったカルーセル
もう動かない
カルーセル

きみを乗せた
カルーセル
ぼくの心の中でだけ
回り続けたあと

いつか
雪の日に
消えてゆく
そっとしずかに
消えたことさえ
わからないように
消えてゆく

(二)
カルーセルが
回っている
誰もいない
カルーセル

乗る人のいない
カルーセルの木馬が
何度も何度も
目の前を駆け抜ける

ぼくの心の中で
ぼくの
夜のしずけさの中で

誰もいない
カルーセルが
回っている

きみを思い出すため

きみの笑い顔

思い出すために

(37) 宇宙を燃やしたら

宇宙を燃やしたら

もしも宇宙を燃やしたら
燃えカスの中には
愛が残っている
確かに憎しみより
愛な気がする
憎しみから命は生まれないのだ

I love you
雲に隠れそうな星に向かって
叫びたい
I love you
宇宙を震わせる位叫びたい

(38) ぼくの夢

ぼくの夢

ぼくには夢がないと
きみは不満そうに言うけど
ぼくの夢は
今のぼく、ぼくの暮らし
ぼくの一分一秒
今のぼくになるために
ぼくは生まれて来た

そしてきみとめぐり会うため
きみと生きる一分一秒は
きみといる今この一瞬が
ずっと夢見ていた
ぼくの夢だったから

Baby, don't cry
きみの涙も
きみの笑顔も
みんなぼくの夢だから

(39) ギターも夢見る

ギターも夢見る

まだ宅配便もなかった時代
その一本のギターは
東京の販売店から東京駅に運ばれ
それからガタゴト、ガタゴト
それは長い長い道のりを
レールの上を
コンテナの隅に載せられ揺られ
熊本駅の荷物預かり所まで
遙々独りぼっちで旅して来たのであった

そこで待つこと数日
とある土曜日の晴れた午後
ギターの前に現れたのは
午前中で終わった中学校の教室を
まっ直ぐに飛び出し息を切らしてやって来た
詰襟姿のひとりの男子中学生

少年とギターは互いに無口に
眩しい顔で見詰め合うのだった

出会いの午後
その日から
二人三脚の夢が始まる

(40) 玉ねぎの涙

玉ねぎの涙

玉ねぎ切って流した涙でも
たしかに涙には
ちがないから

泣き終わった後の
すがすがしさは
ほかの理由で流した
涙の時と同じだった

だから今度
なぜかわからず
涙が出てきた時は

きっと心のどこかに
隠しておいた玉ねぎ
うっかり
切ってしまったからだと
思おう

なんとなく
あなたのことが
原因だという気はしても

あなたの面影の
せいにはせず
あなたの面影の
せいでは決してなく

そうやって
ひとつひとつ
心の中の玉ねぎ
切ってゆこう

そしていつか
あなたのことを思い出しても
涙がこぼれなくなった時

夕暮れの日
の差す
ひとり暮らしの
アパートの台所で
玉ねぎ、切ろう

あなたへのほんとうの
さようならの儀式として
ひとりしずかに

わたしもやっど
あなたのせいでなく

玉ねぎの
玉ねぎによる
玉ねぎのためのなみだを
流せるようになった、と

そしてひとりしずかに
笑おう

夕暮れの日
の差す
ひとり暮らしのアパートの
台所のすみで

改訂履歴

改訂履歴

Ver 1. 0

パート1およびパート2の(40)まで作成しました。

Ver 1. 1

軽微な修正を行いました。

- ・(39) うた
一行削除
- ・(65) 明日夜明け前に
“さようならだ、と” → “さようなら、だと”
- ・(72) 波
先頭位置を前に移動
- ・(100) きみはイマジンと歌うけれど
“人類牧場或いは人類家畜小屋”
- ・“生命いのち” → “生命 (いのち) “
(28) かげろう、(53) 祈り、(61) キリギリスとアリ、(69) ぼくたちの夢は死なない、(79)
グリコのおまけ、(80) 夏の記憶、(81) 夏の木漏れ陽

終わりに

終わりに

お読み頂き、ありがとうございます。

(詩集)きみの夢に届くまで

著 青大井空

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
